



SILVA IAPONICARUM 日林

FASC. XIV • 第十四号

WINTER • 冬

2007

Adam Mickiewicz University
Institute of Oriental Studies, Department of Japanese Studies

Jagiellonian University
Institute of Oriental Philology, Department of Japanese and Chinese Studies

Warsaw University
Oriental Institute, Department of Japanese and Korean Studies

Posnaniae, Varsoviae, Kuki MMVII

ISSN 1734-4328

FINANCIALLY SUPPORTED BY THE ADAM MICKIEWICZ UNIVERSITY INSTITUTE OF ORIENTAL STUDIES

Drodzy Czytelnicy.

Czternasty zeszyt *Silva Iaponicarum* ukazuje się po jubileuszowej konferencji japonistycznej w Krakowie. Konferencja stała się dobrą okazją dla spotkania wszystkich osób związanych z polską japonistyką oraz wielu gości zagranicznych. Dziękujemy organizatorom krakowskiej konferencji za ich wysiłek. Chcielibyśmy także serdecznie złożyć serdeczne podziękowania Muzeum Sztuki i Techniki Japońskiej „Manggha” za wspiałościomysłne udzielenie uczestnikom konferencji gościny.

Jednym z istotnych efektów konferencji jest poszerzenie grona kolegium redakcyjnego *Silva Iaponicarum*. Witamy nowego członka kolegium z nadzieją na jeszcze bardziej efektywną współpracę z japonistyką Uniwersytetu Jagiellońskiego.

Przekazujemy Czytelnikom kolejny zeszyt periodyku, tym razem poświęcony literaturze starojapońskiej. Mamy nadzieję, że oczekiwania naszych czytelników spełni zarówno artykuł poświęcony *Makura no sōshi* jak i publikowane przez nas po raz pierwszy w formacie równoległym *taiyaku* tłumaczenie *Sarashina nikki*.

Kolegium redakcyjne

E-mail: silvajp@amu.edu.pl

Poznań-Warszawa-Kuki, grudzień 2007

Dear Readers,

The fourteenth fascicle of *Silva Japonicarum* comes out after the jubilee conference on Japanese studies in Cracow. The conference was a good opportunity to meet for all individuals related to Japanese studies from all over Poland and from many foreign countries. We would like to thank the organizers for their utmost efforts. Special thanks are addressed to the Museum of Japanese Art and Technology “Manngaha” which generously provided the conference venue.

One of the important results of the conference is the expansion of our editorial board. We welcome the new member hoping for an even more effective co-operation with the Department of Japanese Studies of the Jagiellonian University.

The present fascicle is devoted to the classical Japanese literature. We hope that both the article on *Makura no Sōshi* and the first ever translation in Polish of *Sarashina Nikki* published in a paralel *taiyaku* format are going to fulfil the expectations of our readers.

The editorial board

E-mail: silvajp@amu.edu.pl

Poznań-Warsaw-Kuki, December 2007

読者のみなさまへ

「日林」第14号はクラクフの国際日本学会の終了後に刊行されます。学会は、ポーランド全国の日本学研究者・外国の日本学研究者が会う絶好の機会でした。クラクフ学会を主催されたみなさまにお礼申し上げます。学会の参加者に会場をご提供くださった日本美術技術博物館<マンガ>に心よりの謝意を表したく存じます。

学会の重要な成果の一つは、「日林」の編集委員会のメンバー構成が広がったことです。委員会に加わったメンバーを歓迎し、それが今後のヤギェロン大学とのさらに効果的な協力につながるものと望みます。

この度お届けする私たちの季刊誌最新号は、日本古典文学特集号です。『枕草子』についての論文と「日林」初の試みである対訳形式での『更級日記』ポーランド語訳が、読者のご期待にそうものであることを希望しています。

編集委員会

E-mail: silvajp@amu.edu.pl

2007年12月 ポズナニ・ワルシャワ・久喜

***Silva Iaponicarum* 日林**

Kwartalnik japonistyczny / Quarterly on Japanology / 日本学季刊誌

ISSN 1734-4328

Kolegium redakcyjne / Editorial board / 編集委員会

Redaktor naczelny / Editor in chief / 編集長

Arkadiusz Jabłoński (アルカディオウシュ・ヤブオニスキ)

Beata Bochorodycz (ベアタ・ボホロディチ)

Maciej Kanert (マチェイ・カネルト)

Iwona Kordzińska-Nawrocka (イヴォナ・コルジンスカ・ナブロットカ)

Stanisław Meyer (スタニスワフ・マイヤー)

Kōichi Kuyama (久山宏一)

Anna Zalewska (アンナ・ザレフスカ)

Rada naukowa / Research council / 研究顧問会

Prof. Romuald Huszcza, Warsaw University, Jagiellonian University,

Prof. Agnieszka Kozyra, Warsaw University,

Prof. Alfred F. Majewicz, Adam Mickiewicz University,

Prof. Mikołaj Melanowicz, Warsaw University, Jagiellonian University,

Prof. Ewa Pałasz-Rutkowska, Warsaw University,

Prof. Eстера Żeromska, Adam Mickiewicz University.

Silva Iaponicarum
Uniwersytet im. Adama Mickiewicza
Instytut Orientalistyczny, Zakład Japonistyki
ul. 28 Czerwca 1956 nr 198
61-485 Poznań, Poland
E-mail: silvajp@amu.edu.pl
www.silvajp.amu.edu.pl

SILVA IAPONICARUM IS PUBLISHED WITH THE FINANCIAL SUPPORT OF
THE ADAM MICKIEWICZ UNIVERSITY INSTITUTE OF ORIENTAL STUDIES

SPIS TREŚCI / CONTENTS / 目次

園山千里

平安時代の参詣と参籠

～『枕草子』一一六段の清水寺を中心に～

11

Sugawara Takasue no Musume

Sarashina nikki (Pamiętnik z Sarashiny)

CZEŚĆ 1.

tłumaczenie/translation/翻訳 Adam Bednarczyk

25

STRESZCZENIA / SUMMARIES / 要約

73

AUTORZY / CONTRIBUTORS / 投稿者

77

PRACE NADSYŁANE /

FOR CONTRIBUTORS / 投稿

80

平安時代の参詣と参籠

～『枕草子』一一六段の清水寺を中心に～

はじめに

平安時代に入り仏教の信仰が広まるにつれて、靈験あらたかな仏・菩薩の尊像を礼拝したり、各地にある靈場を巡礼することが頻繁に行われるようになる。『枕草子』「正月に寺に籠りたるは」（三卷本一一六段）は、次のような記述で始まる。

正月に寺に籠りたるは、いみじう寒く、雪がちに氷りたるこそをかしけれ。雨うち降りぬるけしきなるは、いとわるし。¹

正月の参籠中の出来事である。雪も降りがちに凍てつくような寒さに趣を感じるのは、『枕草子』第一段の叙述「冬はつとめて。雪の降りたるは言ふべきにもあらず」²と同等の感慨であろう。雪景色を賛美する一方、一雨来そうなどんよりとした空模様については不快の念を強く抱く。特にある場所や寺に参るときに降る雨については、「いみじう心づきなきもの」（一一七段）³の内の一つに掲げるほど嫌悪の情をあらわにしている。

参籠とは仏寺などに一昼夜籠もって自らの願いを祈願することである。特に正月参籠は仏寺で新年を迎えるという重要な意味を持つ。年越しのための年末・年頭の行事には、厳粛な精進潔斎が求められた。人々は忌み清めることで己の穢行を除去し、転生を願うのである。「祓へ」（神に祈り罪や汚れ・災いを祓い除くこと）を目的とする同様の宮中行事として、「仏名会（十二月の三日間、禁中および諸寺院で『仏名経』を誦し、三世の諸仏の名号を唱えて罪障を懺悔する法会）」、「修正会（毎年正月、諸宗の寺院で修する年始の法会。その年の天下平安、天子安穩などを祈って読経する）」、「修二会（二月の初め頃に厳修する国家安穩を祈って行う法会。も

¹ 『枕草子』（新編日本古典文学全集、小学館）220ページ

² 『枕草子』（新編日本古典文学全集）25ページ

³ 『枕草子』（新編日本古典文学全集）227～228ページ

と奈良東大寺二月堂で二月一日から十四日までの間、本堂観世菩薩像の前で修した法会)」がある。

冒頭にあげた『枕草子』一一六段は「修正会」での参籠を背景として記されたものである。堂舎に籠もり越年することは平安時代に一種の〈風俗〉として定着したらしく、この章段には参籠の世話役の行動、僧侶の願文の声、読経の鐘の音、宿坊にいる供の男たちや下仕えの女・童女の姿、参籠する人々の装束などが非常に鮮やかに語られる。当然のごとく新年以外にも参籠は行われるが、越年という意味でも注目すべき章段だと思われる。当時の参詣の実態や『枕草子』一一六段の舞台となる清水寺参籠の盛行の様子を考察することで、清少納言の清水寺信仰の一端を窺いたい。

参詣の流行～近から遠へ～

参籠のために歩行や牛車で寺社に行く行為を参詣という。参詣の起源について詳しい資料は残されていないが、退位後の上皇の参詣（清和院『三代実録』元慶四年三月十九日・宇多院『大日本史料』承平元年七月十九日条）に早い例をみることができる。その後、平安貴族の間でも参詣が行われるようになるのだが、交通機関や宿泊施設が発展した現代とは異なり、参詣は苦難を伴うものであった。宿泊や交通手段の確保をはじめとして、従者などの人員確保、さらには山賊や海賊から身を守るための道中の危機管理は並々ならぬものであったと推測される。そのような苦行に敢えて立ち向かう原動力とは何だろうか。それは信仰であろう。より高い信仰的充足感や大いなる靈験を求めて人々は、信仰の実践的行為として参詣を行うのである。それゆえ、当初は僧侶などが布教を兼ねて行う参詣が圧倒的であった。奈良時代から平安時代初期にかけて、観音などの現世利益に対する貴族の希求はあったが、特定の寺院に参詣するという手段はみられず、造像や写経、教典読誦などの方法が専らであった。

古代の参詣から近世の参詣までを社会経済史の上から綿密に調査を行った新城常⁴は、道長・頼通前後から遠隔参詣が発達したという。その理由としては第一に貴族層の遠隔参詣への経済的条件の確立である。摂関家を中心とする貴族層は荘園を基盤とした経済的な

⁴ 『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』（塙書房、1982年）

富強を成し遂げる。第二に封戸制や律令的経済体制の衰退による社寺経済の変質である。平安時代初頭まで神社や寺院は、国家や天皇のために奉仕する国家宗教として国家の保護を受け、神封・寺封等の封戸といわれる封禄を支給されていた。しかし、封戸制の衰退により次第に経営難を強いられた社寺は、貴族から経済的恩恵を歓迎することになる。社寺側が経済的保護を期待して参詣誘致を行うようになるのもこの頃からである。貴族生活における信仰の比重が高くなればなるほど社寺側の思惑と相俟って、遊樂を兼ねての参詣も流行すると新城は指摘する。

参詣場所としてはどのような寺があげられるか。まず近距離にある清水寺・石山寺・住吉寺が有名である。『和泉式部日記』には、「つれづれもなぐさめむとて、石山に詣でて七日ばかりもあらむ」⁵と、比較的簡単な面持ちで石山寺に出掛ける様子がみられる。一方、高野山や比叡山は遠隔地のうえ交通事情も悪く、参詣には困難を要した。高野山は弘法大師の衆生済度にさずかる信仰で有名である。「弘法大師留身入定説（弘法大師が今も高野山に生存するという説）」や「納骨霊場（高野山に納骨すれば菩薩になるという思想）」といった提唱がみられるが、これは真言宗内の地位向上や、貴族の信仰と関心を誘致するため、高野山側が意図したものであると先の新城⁶は指摘する。不利な立地条件を克服するためには寺院側の何らかの積極的な手段が必要だったのである。なお、高野山と比叡山は仏教の女性忌避という教義により女性が立ち入ることは許されなかった。

平安中期には南都七大寺の巡礼が行われている。大安寺・薬師寺・元興寺・興福寺・東大寺・西大寺・法隆寺の七寺を巡拝することを七大寺詣でといい、巡礼を記した書としては一一四〇年（保延六年）に書かれた大江親道の『七大寺巡礼私記』などが現存している。難波の四天王寺は、聖徳太子ゆかりの寺として有名である。四天王寺伽藍の西方に没する夕日がまるで極楽浄土を現すようであったため、日想観に適した土地と崇められ多くの参詣者で賑わった。さらに、奈良より南に位置する奥大和には金峰山があり弥勒信仰として盛んになる。平安末期になると西国三十三所巡りが行われる。

⁵ 『和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・讃岐典侍日記』（新編日本古典文学全集）4
3ページ

⁶ 脚注4参照

これは観音の変身の数として上げられる三十三に因んで、西国の諸寺諸堂に祀られる三十三の観音を巡礼することである。各霊場には御詠歌があり、巡礼者はこれを唱える習わしになっている。現在でも参拝者は絶えることがない。

平安時代の文学作品に目を転じると、『源氏物語』『大和物語』『更級日記』『蜻蛉日記』などに豊富に参詣の様子をみることができる。参詣は危険や費用を伴うため自らが参詣するのではなく、遙拝や代参としての参詣がまず行われた。『更級日記』には菅原孝標女の母が孝標女を近くの清水寺には連れて行ったのに、遠出の長谷寺を恐れて、「一尺の鏡を鑄させて、え率て参らぬかはりにとて、僧を出だし立てて初瀬に詣でさすめり」⁷と代わりの僧を遣わしている。この「初瀬（長谷）」は都から牛車で三日間、健脚な者で片道二日（京都から長谷寺まで約七十二キロ）を要する参詣場所であり、女性の身ではなかなか参詣できない場所であった。しかし、遠隔地の参詣は相当な肉体的・精神的負担をかけるため、そのぶん大きな霊験も得られると考えられていた。『源氏物語』「玉鬘」巻では、夕顔の娘玉鬘が「歩むともなく、とかくつくろひたれど、足の裏動かれずわびしければ、せん方なくて休みたまふ」⁸と足の痛みを耐えて参詣をする様子が見られる。これほどまでして幼女が参詣を志したのは、「仏の御中には、初瀬なむ、日本の中にはあらたなる験あらはしたまふと、唐土にだに聞こえあむなり」⁹という豊後介の言葉であった。本尊の十一面観音は霊験あらたかな仏として「唐土（中国）」まで評判になっているということである。これは、『源氏物語』が書かれた当時において、長谷観音の霊験がいかに卓越していたかをもものがたろう。

文学に登場する「清水寺」

『枕草子』一一六段の参籠場所は清水寺である。清水寺は山城国愛宕郡（京都市東山区）にある北法相宗の寺である。光仁天皇の頃に再建されたと伝えられ、後に坂上田村麻呂が観音を祀って、北観音寺と呼ばれるようになる。後に清水寺と改称。本尊は十一面観音像

⁷ 『和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・讃岐典侍日記』（新編日本古典文学全集）3
20ページ

⁸ 『源氏物語③』（新編日本古典文学全集）105ページ

⁹ 『源氏物語③』（新編日本古典文学全集）104ページ

である。由来については数種の縁起に収められているが、『今昔物語集』（巻十一・三十二）に従えば次のようである。賢心（得度後、延鎮と改名）は夢で北に行くことを告げられ、夢告どおり北へ赴く。すると清らかな滝の崖の上で、行叡という白髪の老翁に出会う。約二百年の間草庵で賢心を待っていたという老翁は、自分が戻ってこない場合この場所に堂を建てて欲しいと願い、かき消すようにいなくなった。老翁を待つ間、賢心は山で修行を続ける。そのころ、坂上田村麻呂という人が、産後の妻に食べさせようと鹿狩りに来ていた。鹿を切り裂いている間、不思議な水が流れているのに気づき、飲んでみると体中がさわやかになり心も楽しくなってきた。水源を求めて歩いているとやがて滝の下で読経を行う賢心に会う。田村麻呂は賢心から事の子細を聞き、最終的に深い契りを約束し帰途につく。その話を聞いた妻は殺生による懺悔の心を起こした。以後、得度を得た延鎮と田村麻呂は寺院を創建し、妻も金色の十一面観音像をつくった。これが清水寺の起こりだというのが、寺院完成前にもさまざまな靈験を示し、供養の後は、

世挙テ崇メ奉ル事無限シ。此寺ニ参リ合ヘル事、風ニ随ヘル草ノ如シ。時、世ノ末ニ臨ト云ヘドモ、人願ヒ求ル事有テ、此観音ニ心ヲ至シテ祈リ申スニ、靈験ヲ不施給ト云フ事無シ¹⁰

と、この観音に心を込めて祈るならば、靈験を施さないことはないという。それゆえ、多くの人がこぞって帰依をするという。清水寺は争乱や天災により何度か焼失するが、さまざまな援助により再建されている。例えば、九七六年（貞元元年）六月には大地震で倒潰、一〇六三年（康平六年）八月・一〇九一年（寛治五年）三月には焼失するが、一〇九四年（嘉保元年）には落慶供養が行われるという迅速な対応をみても、それほど人々から信仰を得ていたということがわかっていよう。『梁塵秘抄』巻二「靈験所歌」（313）にも、「観音験を見する寺 清水石山長谷の御山 粉河近江なる彦根山間近く見ゆるは六角堂」¹¹と一番目に歌われているように、観音霊場として有名な地であった。さらに観音信仰の盛行は、『日本霊異記』や『今昔物語集』巻十六が顕著であるように観音靈験譚を生み

¹⁰ 『今昔物語集三』（新日本古典文学大系、岩波書店）89ページ

¹¹ 『神楽歌・催馬楽・梁塵秘抄・閑吟集』（新編日本古典文学全集）268ページ

出すことになる。靈驗譚とは祈願をすることで現れる効能を具体的に述べた話のことであり、靈威を説くものや現世利益を説くもの、または特定の寺院と結びついたものもある。例えば、『今昔物語集』（巻十九・四一）¹²には清水観音の加護で幼児が救われるという靈驗譚がある。ある日清水に参詣した女が、誤って抱いていた幼児を谷に落としてしまった。あまりにも突然のことでなす術もない女は「観音助け給へ」と半狂乱で祈祷する。その願いが届いたのか観音の加護で、幼児は谷底の木の葉の上に転落して無事だったという話である。

観音靈驗譚以外にも平安時代以降の作品には、「清水に参る」「清水に籠もる」といった表現を多くみることができる。『更級日記』には、長谷寺までの道中の危険や石山寺参詣途中の逢坂山越えの厳しさ、さらには人里離れた鞍馬山を避けて、孝標女の母がわずかに近場の清水寺参詣に連れて行ってくれたと回想している。

「初瀬には、あなおそろし。奈良坂にて人にとられなばいか
がせむ。石山、関山越えていとおそろし。鞍馬はさる山、率
て出でむいとおそろしや。親上りて、ともかくも」と、さし
はなちたる人のやうにわづらはしがりて、わづかに清水に率
てこもりたり。¹³

当時の参詣が女性にとっていかに危険なものであったかを物語る一文である。さらに、この文脈からは初瀬（長谷）・石山・鞍馬といった参詣地についての情報がすでに流伝していたことがわかる。多くの選択肢の中から参詣地を選び出すことができるほど、参詣が一般化しつつあったことも証明できよう。先ほど述べた長谷寺は遠方に位置していたため参詣には躊躇を余儀なくされたが、清水寺は都から近いという地理的条件が適い参詣者を多く集めた。

そのような清水寺を舞台として物語は作られる。『大和物語』には、「小野小町といふ人、正月に清水にまうでにけり」¹⁴と小野小

¹² 『今昔物語集四』（新日本古典文学大系）211ページ

¹³ 『和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・讃岐典侍日記』（新編日本古典文学全集）319ページ

¹⁴ 『竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語』（新編日本古典文学全集）408ページ

町が清水寺に参詣している。仁明天皇崩御の後、悲しみのあまり姿を消し法師になった僧正遍照と小野小町が清水寺の御堂で再会を遂げるといふ話である。参籠中の清水寺で小町は読経をしていた遍照の存在を確認する。二人は長い間の空白を埋めるかのように親密な贈答歌を交わすのであるが、結局遍照が身を隠してしまう。対顔する機会は得られなかったが、小町の清水参籠がなければ遍照との贈答歌はあるまい。参籠は人との再会・出逢いを可能にするのである。

『堤中納言物語』「このついで」は、春の雨の日に宮廷内で人々が自身の体験を語る物語である。第二話として清水寺参籠中の話がある。

去年の秋ごろばかりに、清水に籠りてはべりしに、かたはらに、屏風ばかりを、ものはかなげに立てたる局の、にほひいとをかしう、人少なるけはひして、をりをりうち泣くけはひなどしつつかおこなふ¹⁵

話し手は隣の部屋で勤行している奥ゆかしい人物に興味を抱く。明日は満願で御堂を下りる夕方、風に舞う木の葉を物思いにふけりながら眺めていると、隣の部屋から微吟する声が聞こえてくる。その歌があまりにも哀切でその時分にふさわしいものであったことから返歌を憚られるという内容である。同じ場所に幾日も籠もって本尊に心を寄せる行為は、自然と感性を鋭くするのだろうか。

さきほどの『大和物語』も参籠の場で歌が詠まれていた。実は清水寺以外の参籠を舞台とする物語でも歌が詠まれる例は多い。詠歌によって見ず知らずの者が心を通わしたり、歌が外界との連絡手段になることもある。詳細は今後の課題とし、ここでは参籠の場での詠歌が、物語において重要な役割を担っていることのみを指摘しておく。

『枕草子』一一六段～参拝者の位相について～

具体的に一一六段の清水寺参籠をながめていくことにする。清水寺に関連した章段は一一六段以外にも四例を確認することができる。「清水に籠りたりしに（二二五段）」は、清水参籠中の定子と

¹⁵ 『落窪物語・堤中納言物語』（新編日本古典文学全集）400ページ

の歌のやりとりについて、「清水などにまゐりて（二―三段）」は清水や他の参詣場所への道中の景色について描いている。「さわがしきもの（二三八段）」には、「十八日に、清水に籠り合ひたる」という一文しかないが、観音の縁日である十八日の清水寺が大変な混雑で喧騒夥しかったことがわかる。清水寺を描く章段の中でも一一六段は参籠を主題としつつ、さまざまな観点から清水寺を叙述していく。清少納言の頻繁な清水寺参詣・参籠があってこそ、叙述できる素材だと思う。平安時代に隆盛する参籠の〈風俗〉を知る上でも重要な章段であろう。

一一六段は途中で参詣とは逸脱する文もあるが、主に正月参籠を中心とした構成となっている。まず、参詣地に到着した参拝者は参籠中に過ごす「局」、つまり区切られた部屋を与えられる。その局までの移動は以下のように描かれる。

清水などに詣でて、局するほど、くれ階のもとに、車引き寄せて立てたるに、帯ばかりうちしたる若き法師ばらの、足駄といふ物をはきて、いささかつつみもなく下りのぼるとて、何ともなき経の端うち読み、俱舎の頌など誦じつつありくこそ、所につけてはをかしけれ。わがのぼるはいとあやふくおぼえて、かたはらに寄りて、高欄おさへなどして行くものを、ただ板敷などのやうに思ひたるもをかし。「御局してはべり。はや」と言へば、沓ども持て来ておろす。¹⁶

堂の外陣には、車寄せの前の小川に架けられた橋を渡って入場する。この「くれ階」については従来から反りのついた橋なのか、屋根の付いた長い廊下のことなのか解釈が分かれている。しかし、若い法師が危なげもなく下駄で橋を行き来すること、清少納言らが高欄などに掴まって歩く様子からみると、萩谷朴の解釈通り¹⁷反りのある橋と考えるのが妥当であろう。反り橋という不安定な橋の上でも、難なく経文の一部や『阿毘達磨俱舍論本頌』を唱えながら歩く、法師のひたむきな宗教活動に清少納言は趣を感じているわけである。橋とは両側を結んで掛け渡した建築物であるが、視点を変え

¹⁶ 『枕草子』（新編日本古典文学全集）220～221ページ

¹⁷ 『枕草子解環三』（同朋舎、1982年）。第百十五段「清水寺参籠」の問題点（二）にて、「くれはし」に関する考証をしている。

てみると俗世間と信仰の地である清水寺とを結びつける役割をも担っている。橋の上の法師は経文読誦という自らの勤行のほかに、清水寺という聖なる空間に人々を誘う働きをも兼ね備えているのである。傍線部は橋を渡る際の恐怖心を描いたものであるが、橋の境界性を考慮してみると、俗から聖へ移動する際の緊張感を描いた瞬間としてよむことも可能であろう。

法師は「局」への取次のほかに、「局」の設立もしている。

小法師ばらの、持ちあるくべうもあらぬおに屏風の高きを、いとよく進退して、畳などをうち置くと見れば、ただ局に局ねたてて、犬防ぎに簾さらさらとうちかくる、いみじうしつきたり

18

物慣れた法師たちが手際よく「局」の仕切りをつくっていく。法師は参詣者到着時の接待をはじめとして小部屋設立、さらには火鉢や果物、手洗いの器など参籠に必要な物を参拝者に届けている。法師の仕事は多岐にわたり、いわば清水寺参籠の案内人である。これは当時の参詣地の中でも清水寺のみが行う特異な奉仕だったのか、詳しい事情は定かではない。しかし、この章段をよむ限り清水寺は参拝者へのさまざまな気配りをしており、このような行為が清水寺の評判を高めることに繋がっていたと考えられる。

さて、清水寺にはどのような人が参拝に来ていたのだろうか。一一六段にはさまざまな人物が登場するが、外観、特にその人物の容姿や装束について事細かく描写される。圧倒的に男性描写が多いのが特徴であり、付き添いの人物の装束まで描かれる。

I 夜などは籠らで、人々しき人の、青鈍の指貫の綿入りたる、白き衣どもあまた着て、子どもなめりと見ゆる若き男の、をかしげなる装束きたる、童べなどして、侍などやうの者どもあまたかしこまり、圍繞したるもをかし。かりそめに屏風ばかりを立てて、額などすこしつくめり。¹⁹

¹⁸ 『枕草子』（新編日本古典文学全集）224ページ

¹⁹ 『枕草子』（新編日本古典文学全集）225～226ページ

Ⅱ清げなる若き男どもの、主と見ゆる二、三人、桜の襖、柳などいとをかしょうて、くくりあげたる指貫の裾もあてやかにぞ見なさる。つきづきしき男に、装束をかしょうしたる餌袋抱かせて、小舎童ども、紅梅、萌黄の狩衣、色々の衣、押し摺りもどろかしたる袴など着せたり。²⁰

Iは、昼間のみの参籠を記したものの。見るからに立派な人物は、青鈍色の綿入れの指貫を白い着物と重ね着している。平安時代に綿入れの着物を着用することは滅多にない。ここでは正月という時節柄特別な防寒対策をしているのだろうか。息子であろうと推測する人物の装束も美しいという。Ⅱは正月の出来事ではなく、二月末、三月初めの桜の季節の参籠場面を描く。主人と思われる二、三人はもちろんのこと、従者や小舎人童にもきらびやかな装飾を施しているという。I、Ⅱはすべて男性への視点で終始する。参拝者が男性の場合は装束の特徴をはじめとして、親子関係や主従関係の推測までもおこなっている。それに対して、女性については橋を渡る際の描写、「衣うへさまに引き返しなどしたるもある。裳、唐衣などことごとしく装束きたるもあり」²¹というのみである。「裳」「唐衣」といった女房装束の名称を羅列するにとどまるのである。清少納言自身が女性であるため、同性の装束についてはすでに承知しており、あえて書きとめる必要がなかったのだろうか。女性の行動は制限されており寺内においてもむやみに出歩くことは考えられないことから、女性の描写が少ないのは当然かもしれないが、参拝者の視点に男性への偏重がみられるのは『枕草子』の特徴ともいえよう。ところで、Iの引用文文末にみられるように、「かりそめに屏風ばかりを立てて、額などすこしくめり」と、他の人との接触を屏風で隔てて簡略な礼拝をしている人物がいる。礼法がかりそめであるのは短時間の滞在であるからだろうか。額をつけて礼拝をする人物はほかにも描かれる。

かたはらによろしき男の、いとしのびやかに額など、立ち居のほども心あらむと聞えたるが、いたう思ひ入りたるけしきに

²⁰ 『枕草子』（新編日本古典文学全集）226ページ

²¹ 『枕草子』（新編日本古典文学全集）221ページ

て、寝も寝ず行ふこそ、いとあはれなり。うちやすむほどは、
経を高くは聞えぬほどによみたるも、たふとげなり。²²

両膝や両肘、額を地につけて礼拝することは五体投地といわれ、最高
の敬意を表す。清少納言は夜通し一睡もせずに行行する思い詰めた
様子に尊さを感じ、この男の願意を成就させたいとまで思う。この
ように熱心に勤行をする人物がいる一方で、肝心の勤行を閑却して
「局」にいる女性のみに関心を抱く若い男たちもいる。

若き者どもは、とかく局どものあたりに立ちさまよひて、仏の
御方に目も見入れたてまつらず。別当など呼び出でて、うちさ
さめき物語して出でぬる、えせ者とは見えず。²³

当時の社寺参詣が純然たる信仰心だけで成り立っていたわけではな
く、人々の出会いを提供する男女の交流の場であったこともわかろ
う。

清少納言の「清水寺」

清少納言にとって清水寺とはいかなる場であったのだろうか。ここ
では清少納言が清水寺に対してどのような感懐を抱いているのかみ
ていきたい。注目すべき点は観音に対する形容が一一六段内に二カ
所見られることである。

- ① 局に入るほども、み並みたる前を通り入らば、いとうたてあ
るを、犬防ぎのうち見入れたる心地ぞ、いみじうたふとく、
「などて月ごろ詣でて過ぐしつらむ」と、まづ心もおこる。

24

- ② 御みあかしの、常灯にはあらで、うちにまた人の奉れるが、
おそろしきまで燃えたるに、仏のきらきらと見えたまへる
は、いみじうたふとくに、手ごとに文どもをささげて、礼盤
にかひろぎちかふも、さばかりゆすり満ちたれば、とりはな

²² 『枕草子』（新編日本古典文学全集）223ページ

²³ 『枕草子』（新編日本古典文学全集）226ページ

²⁴ 『枕草子』（新編日本古典文学全集）221～222ページ

ちて聞きわくべきにもあらぬ²⁵

①は御堂の様相に尊さをおぼえ信仰心を喚起する場面、②は仏への厳かな気持ちを吐露する場面である。傍線部のように観音に対する形容は、「たふとし」「きらきらと」という賛美のことばで表現される。荘厳な雰囲気漂う御堂のさまを、適切に表現したことばであろう。このような表現について当時の観音信仰の盛行を率直に表したにすぎない、というのはたやすい。清少納言にとって清水寺はいかなる存在であったのか。清水寺と同様に十一面観音像を本尊とし、人々の信仰を集めた長谷寺に関する章段に目を向けてみよう。長谷寺について『枕草子』は「池は（三六段）」「卯月のつごもり方に（一一〇段）」「初瀬に詣でて、局にみたりしに（一本二七段）」の三カ所で取り扱っている。長谷寺参籠についての具体的な記述がある一本二七段を一一六段との比較対象としてみよう。すると、同じような参詣場所であっても一一六段の清水寺の描写との大きな相違が生じてくるのである。まず、一本二七段は以下のように始まる。

初瀬に詣でて、局にみたりしに、あやしき下藤どもの、うしろをうちまかせつつみ並みたりしこそ、ねたかりしか。²⁶

冒頭部から「ねたかりしか」という否定表現が使われる。このすぐ続きの文にも、大変な決心をして参詣したのだが、河の音などが恐ろしく、階段のある長廊下を登るにも疲れ果て、

いつしか仏の御前をとく見たてまつらむと思ふに、白衣着たる法師、蓑虫などのやうなる者どもあつまりて、立ちみ、額づきなどして、つゆばかり所もおかぬけしきなるは、まことにこそねたくおぼえて、おし倒しもしつべき心地せしか²⁷

とある。先に述べたように、長谷寺は都から遠く道中も難儀なため、余程の信仰心を奮い起こさないと参詣できない地であった。そ

²⁵ 『枕草子』（新編日本古典文学全集）222ページ

²⁶ 『枕草子』（新編日本古典文学全集）465ページ

²⁷ 『枕草子』（新編日本古典文学全集）465ページ

れにもかかわらず、室内では浄衣姿の修行者や雨具の蓑・襦袢をまとった見苦しい参拝者がめいめいに振る舞っている。そのような姿が不愉快だというのである。さらには、

やむごとなき人などのまゐりたまへる御局などの前ばかりをこそ、払ひなどもすれ、よろしき人は、制しわづらひぬめり。さは知りながらも、なほさしあたりてさるをりをり、いとねたきなり²⁸

と、人払いをしない寺側の気配りについて不満を露わにする。清水寺での行き届いた持てなしとはだいぶ懸け離れた対応であることがわかっていこう。

以上のように、一本二七段では参籠中の参拝者に対する不快感や長谷寺の対応の悪さに関する記述しかみられない。観音に対する形容はなく、唯一先に引用したように、「いつしか仏の御前をとく見たてまつらむと思ふ」²⁹という記述はあるものの、すぐに参拝者の無礼な礼拝の様子に目が転じている。二重傍線で示したように章段内全体が「ねたし」という表現に基づいているわけである。一一六段では観音に対する形容の表現以外にも、「をかし」（十一例）、「あはれ」（二例）と好ましい表現が多用されている。正月参籠という時期も配慮すべきだと思うが、否定表現が一切あらわれない一一六段の記述をみる限り、清少納言にとって清水寺は観音の霊所として特別な場所であったと考えられよう。

また、前節で述べたように清水寺を描く一一六段には男性を中心とする高貴な身分の人物描写がみられた。人物を〈限定〉して、その人物の服装や振る舞いについて具体的に叙述するのが特徴であった。一方、一本二七段では、「あやしき下臈ども」「白衣着たる法師、蓑虫などのやうなる者ども」（先の引用文に傍線を施した）と、相手を低く扱う時に使う「ども」を頻用して、参拝者を眼下に見下ろす描写傾向がみられる。個人に関する具体的記述はみられず、人物を〈一括〉して抽象的に表現するのが特徴である。同じ参籠場面でも清水寺と長谷寺について、これほどまでに表現の仕方が異なるのは非常に興味深い。

²⁸ 『枕草子』（新編日本古典文学全集）465～466ページ

²⁹ 脚注27の引用文を参照

おわりに

平安時代の参詣と参籠について『枕草子』一一六段を中心に考察してみた。『枕草子』の記述を比較検討することで、清少納言にとって清水寺が特別な存在であったことがわかった。この結果について、清少納言が清水寺を愛好していたと言うだけではあまりにも短絡的である。平安時代、清水寺と長谷寺はいかなる宗教的権威でもって人々（特に貴族層）に影響を及ぼしたのか。受容の如何を考えると、『枕草子』の表現方法は重要な意味を持つだろう。

Sugawara Takasue no Musume

***Sarashina nikki* (Pamiętnik z Sarashiny)**

Tłumaczenie/translation/翻訳: Adam Bednarczyk

Od tłumacza

Zarys biografii autorki

Autorka *Sarashina nikki*, której imię pozostaje nieznane, do historii literatury japońskiej weszła pod przydomkiem córki Sugawary Takasue 菅原孝標* (972-? A. D.). Przyszła ona na świat najprawdopodobniej w 5 roku ery Kankō 寛弘 (1008 A. D.) w rodzinie, z której regularnie rekrutowano profesorów literatury do Akademii Cesarskiej. Jej dziadkiem był Sugawara Michizane 菅原道真 (845-903 A. D.), wybitny poeta, polityk i konfucjanista, który przegrał walkę o wpływy na dworze z rodem Fujiwara. Jego odejście spowodowało spadek prestiżu politycznego rodu Sugawarów, a jego następcy związali się z Akademią i jej zarządzaniem. Ojciec, dziadek i pradziadek Takasue pełnili funkcje rektora Akademii i byli profesorami literatury. Również jego najstarszy syn, Sadayoshi 定義 (zm. 1064? A. D.), sprawował te funkcje za życia jego siostry.

Ojciec autorki rozpoczął karierę zawodową jako zastępca zarządcy prowincji Kazusa 上総, a zakończył ją jako zastępca zarządcy prowincji Hitachi 常陸. Matką autorki była prawdopodobnie córka Fujiwary Tomoyasu 藤原倫寧 (?-977 A. D.), poety i zarządcy prowincji Ise 伊勢. Była ona jednocześnie przyrodnią starszą siostrą autorki *Kagerō nikki* 『蜻蛉日記』 (*pamiętnik ulotnych chwil*, 974 A. D.), matki Fujiwary Michitsuny 藤原道綱 (ok. 936-995 A. D.).

Większość faktów z życia autorki tekstu znana jest ze wspomnień spisanych w *Pamiętniku*. Utwór otwiera opis ostatnich chwil

* W tekście nazwiska japońskie zdecydowano się podawać zgodnie z ich oryginalną kolejnością (nazwisko poprzedza imię).

pobytu w Kazusa, gdzie towarzyszyła ona ojcu i macosze. Gdy po czterech latach powrócili do stolicy, autorka miała 13 lat.

Był to szczególny okres w jej życiu. Powrót do Heian 平安京 pozwolił jej rozwinąć własne pasje, w szczególności zamiłowanie do opowieści. W 1024 r. A. D. przy narodzinach dziecka umarła jej starsza siostra, osierocając dwie córki, które wychowywała prawdopodobnie autorka. Pamiętnik sugeruje również, iż sprawowała ona pieczę nad domostwem rodziców od czasu, gdy jej matka oddała się praktyce religijnej, krótko po tym, gdy w 1036 r. A. D. ze służby w prowincji Hitachi powrócił Takasue.

W wieku 32 lat autorka kilkakrotnie udawała się na służbę do księżniczki Yushi 祐子, młodszej córki cesarza Gosuzaku 後朱雀天皇 (1036-1045 A. D.). Wkrótce wyszła za mąż za Tachibanę Toshimichiego 橘俊通, co na pewien czas przerwało jej służbę w pałacu. Jej mąż, podobnie jak Takasue, należał do klasy zarządców prowincji. Gdy otrzymał nominację na stanowisko w Shimotsuke 下野, pozostawił żonę w stolicy, umożliwiając jej dalszą, czteroletnią posługę u księżniczki. Wtedy urodził się prawdopodobnie jej syn Nakatoshi 仲俊 (1041 – ? A. D.). Rok śmierci autorki jest nieznany, datuje się ją jednak po 1060 r. A. D. Córka Sugawary Takasue zapamiętana została głównie dzięki *Pamiętnikowi z Sarashiny*. Jej autorstwu przypisuje się również cztery fikcyjne *monogatari*, z których do dnia dzisiejszego przetrwały jedynie dwa: *Hamamatsu chūnagon monogatari* 『浜松中納言物語』 (opowieść o Radcy Dworu Hamamatsu, ok. 1058) i *Yowa no nezame* 『夜の寝覚』 (przebudzenie o świcie, II poł. XI w.); dwa pozostałe utwory zaginęły. Poza tym jest autorką licznych *waka*, które umieściła w pamiętniku.

Historia badań nad rękopisem

Według Yoshioki Hiroshiego istnieje prawie trzydzieści rękopisów i wersji drukowanych *Sarashina nikki*[†]. Samoryginał

[†] Yoshioka Hiroshi 1989. „<<Tada ki zo mitsu tateru>> Sarashina nikki: kaisetsu” („rosły tam zaledwie trzy drzewa” komentarze do „Pamiętnika z Sarashiny” [w:] *Shin Nihon koten bungaku taikai* (nowe kompendium literatury starojapońskiej) t. 24, Tōkyō: Iwanami Shoten, s. 568 (吉岡 曠「ただ木ぞ三つ立てる」更級日記：解説、

rękopisu niestety zaginął. Wszystkie zachowane do dziś teksty pochodzą od rękopisu Fujiwary Teiki 藤原定家 (1162-1241 A. D.). Dzięki temu wybitnemu poecie i znawcy literatury klasycznej oraz potomkowi Takasue, Sugawarze Tamenadze 菅原為永 (1158-1246 A. D.), pamiętnik został odnaleziony w domu ojca autorki. Późniejsza popularność *Sarashina nikki* to w głównej mierze zasługa Teiki, który przepisał tekst oraz stworzył doń postowie. Napisał je po chińsku (w *kanbunie*), załączając bogate noty bibliograficzne w sylabariuszu *kana*. Również to on jako pierwszy wzmiankuje o *Sarashina nikki*. W jednym z jego utworów – *Meigetsuki* 『明月記』 (*zapiski przy jasnym księżycu*) – przy dacie 17 dnia 6 miesiąca 2 roku ery Kangi 寛喜 (1230 A. D.) pojawia się następujące zdanie: „Gubernator Tajimy (Minamoto Ienaga 源家長) uczestniczył po południu w *seidan*.[‡] Wypożyczył wówczas różne opowieści: *Pamiętnik ulotnych chwil*, *Pamiętnik z Sarashiny*, *Pamiętnik Ministra Takafusy* (spisany *kaną* w erze Angen), *Zbiór Stu Poematów Ministra Prawej Strony z ery Jishō* [...] (tłum. autora)[§].” Fragment wskazuje jednoznacznie, że tekst skopiowany przez Teikę przekazany został na pewien czas w ręce Ienagi. Poeta wypożyczył dwa rękopisy, które oddał także do przepisania. W okresie Kamakura (1192-1333 A.D.) istniało niewątpliwie kilka rękopisów oraz zmodyfikowanych kopii pamiętnika. Ponieważ oryginał *Sarashina nikki* zaginął i zasadniczo pozostał tylko jeden rękopis, to właśnie ta wersja powielana jest współcześnie. Kopia Teiki przetrwała przede wszystkim dzięki cesarzowi Gosai 後西天皇 (1655-1663 A. D.), który nabył pamiętnik. Kolejni cesarze dziedziczyli go jako skarb domu cesarskiego, toteż mógł on wiele wieków przeleżeć bezpiecznie

新日本古典文学大系 2 4、岩波書店).

[‡] *Seidan* 清談 (chiń. *qingtan*) – spotkania towarzyskie, które swój początek wzięły w Chinach, w królestwie Wei 魏 za czasów dynastii Jin 晋. Stały się popularne szczególnie wśród arystokracji, a dotyczyły – w przeciwieństwie do kwestii związanych z państwowo-religijną ideologią Konfucjusza 孔子 – zawilej filozofii, ezoteryki, mistyki nauk Laozi 老子 i Zhaungzi 莊子.

[§] Yoshioka Hiroshi *ibid.*: 569.

w Skarbcu przy Urzędzie do Spraw Dworu w Kyōto, gdzie do dnia dzisiejszego jest przechowywany.

W XVIII wieku – ważnym okresie zwrotu ku klasycznej literaturze japońskiej i systematycznym badaniom tekstów – do rękopisu Teiki mieli dostęp wybitni filologowie, między innymi Kamo Mabuchi 賀茂真淵 (1697-1769 A. D.) i Moto'ori Norinaga 本居宣長 (1730-1801 A. D.). Obaj badacze stwierdzili konieczność rekonstrukcji rękopisu, gdyż był on uszkodzony, a przy okazji wyjaśnili także prawdopodobną genezę znaczenia tytułu utworu (patrz niżej). Ostatecznie jednak rękopis *Sarashina nikki* pozostał w stanie pierwotnym i dopiero w roku 1924 A. D., dzięki badaniom Sasakiego Shinaoki 佐佐木信綱 i Tamai Kōsuke 玉井幸助 doprowadzono do odtworzenia pierwotnego stanu rękopisu Teiki. Manuskrypt znajdował się w Pawilonie Hōmei 豊明殿**, pośród wielu innych tekstów. Profesor Tamai tak oto opisuje pierwsze zetknięcie z oryginałem: „Pudełko zewnętrzne, jedwabna obwoluta, środkowe pudełko i osłona usuwane były po kolei, aż w końcu ujrzałem cenną małą szkatułkę ozdobioną wzorem niebieskich fal, z księżycem wytłoczonym w lace. Ona także została otwarta, a w jej wnętrzu znajdował się rękopis ufarbowany w oryginalnych kolorach, które przetrwały siedem stuleci.”††

Geneza tytułu

Nazwa własna miejscowości Sarashina nie pojawia się w tekście. Tytuł pamiętnika można wyjaśnić na podstawie okoliczności opisanych w jednym z końcowych fragmentów tekstu.

W roku 1058 mąż autorki, Tachibana Toshimichi, umiera wskutek nagłej choroby. Ponieważ w jego rezydencji, siedzibie zarządcy Shinano, mieszkali liczni krewni, po śmierci małżonka wdowa wyprasza ich wszystkich, by móc pozostać w samotności. *Pewnego mrocznego wieczoru* – jak napisano w pamiętniku –

** Jeden z pawilonów w obrębie Pałacu Cesarskiego pełniący funkcję sali bankietowej.

†† Hisamatsu Sen'ichi i. in. 1960. *Heian nikki* (pamiętniki ery Heian), Tōkyō: Sansedō, s. 401-402. (「平安日記」久松潜一[ほか]、三省堂、東京), tłum. autora.

odwiedził ją szósty według starszeństwa bratanek. Ciotka ze zdziwieniem rzekła: *Księżyc wzeszedł, po cóż przybywasz tej nocy pod spowitą w mroku górę Obasute?* Wiersz ten, jak zauważył Tamai, bezpośrednio nawiązuje do poematu 878 nieznanego autora z XVII księgi *Kokin wakashū*^{††}:

わが心なぐさめかねつ更科やをばすて山にてる月を見て^{§ §}
Wa ga kokoro nagusame kanetsu Sarashina ya Obasute yama ni teru tsuki o mite // Spoglądałam na księżyc świecący nad górą – Porzuconą Staruszką – czyż w Sarashina me serce zazna pocieszenia? (tłum. autora)

Góra Obasute 姨捨山 (dosł. ‘porzucona starucha’), która znajduje się w miejscowości Sarashina, słynęła z pięknych widoków przy świetle księżyca w pełni. Położona w prowincji Shinano Sarashina była także ostatnim miejscem służby Tachibana Toshimichi. Zgodnie z rzeczywistością, utwór powinien mieć tytuł: *Obasute [no] nikki* – (pamiętnik [spod] Obasute). Byłoby to jednak rozwiązanie z pewnością zbyt mało wyrafinowane. Stąd być może wywodzić należy ostateczny tytuł tekstu.

W pracy nad tłumaczeniem wykorzystano tekst oryginalny *Sarashina nikki* zamieszczony na stronach 371-433 tomu 24 serii *Shin Nihon Koten Bungaku Taikei* 新日本古典文学大系 (red. Satake Akihiro 佐竹昭広, Ōsone Shōsuke 大曾根章介, Kubota Jun 久保田淳 i Nakano Mitsutoshi 中野三敏), wydanego przez tokijskie wydawnictwo Iwanami Shoten w roku 1989.

Publikowany przekład *Pamiętnika* to tłumaczenie filologiczne. Jego fragmenty wykorzystano w pracy magisterskiej tłumacza.

^{††} Pierwsza z 21 cesarskich antologii poezji japońskiej, skompilowana przez Ki no Tsurayuki 紀貫之 (ca. 870-945 A.D.), Ki no Tomonori 紀友則 (845?-907 A.D.), Ōshikōchi no Mitsune 凡河内躬恒 (859?-925? A.D.) i Mibu no Tadamine 壬生忠岑 (860?-920? A.D.) w roku 905 A.D.

^{§§} 1989. *Shin Nihon koten bungaku*, t. 5, Tōkyō: Iwanami Shoten s. 265 (『古今和歌集』新日本古典文学大系 5、東京、岩波書店).

Sugawara Takasue no musume

Sarashina nikki (Pamiętnik z Sarashiny)

(CZĘŚĆ 1)

Człowiek wychowany w dalekiej prowincji¹, odleglejszej niż krańce traktu na wschód², musi wydawać się bardzo nieokrzesany. Zaczęłam o tym rozmyślać, od kiedy dowiedziałam się, że są na świecie rzeczy zwane opowieściami. Zapragnęłam wtedy w jakiś sposób się z nimi zapoznać. W beczynne popołudnia i wieczory przysłuchiwałam się fragmentom rozmaitych historii, jak choćby tej o Promienistym Genji³, które opowiadały mi starsza siostra⁴ lub macocha⁵, a moje pragnienie wciąż narastało. Zastanawiałam się, w jaki sposób są one w stanie opowiadać te wszystkie historie z pamięci. Ponieważ nie mogłam się już doczekać, kazałam wyrzeźbić dla siebie posąg Buddy Uzdrziciela⁶ wysokości równej mnie samej⁷. Gdy nikt mnie nie widział, obmywałam ręce i potajemnie udawałam się przed jego oblicze. Biłam mu pokłony i modliłam się z całego serca: „Spraw, bym mogła pojechać jak najprędzej do stolicy, tak wiele jest tam tych opowieści. Pozwól mi, proszę, przeczytać je wszystkie!”

Gdy skończyłam trzynaście lat⁸, mogliśmy się wreszcie udać do stolicy⁹. 3 dnia miesiąca Długiego Księżyca¹⁰ wyjechaliśmy przez bramę i udaliśmy się do miejsca zwanego Imatachi¹¹.

菅原孝標女 『更級日記』

あづま路の道のはてよりも、猶奥つかたに生ひ出でたる人、いか許かはあやしかりけむを、いかにおもひはじめける事にか、世中に物語といふ物のあんなるを、いかで見ばやと思ひつゝ、つれづれなるひるま、よひゐなどに、姉、継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところづゝ語るをきくに、いとづゆかしさまされど、わがおもふまゝに、そらにいかでかおぼえかたらむ。いみじく心もとなきまゝに、等身に薬師仏を作りて、手あらひなどして、人まにみそかに入りつゝ、「京にとくあげ給て、物語のおほく候なる、あるかぎり見せ給へ」、と身をすてて額をつき、いのり申すほどに、十三になる年、のぼらむとて、九月三日かどでして、いまだちといふ所にうつる。

Nasz stary dom, w którym przez długie lata przyzwyczajona byłam się bawić, оголоcono¹² ze wszystkiego do tego stopnia, że na przestrzał było widać jego drugą stronę. O zachodzie słońca pojawiła się czarująca mgła. Wsiadając do powozu¹³ spjrzałam ostatni raz w kierunku domu i pomyślałam o Buddzie Uzdrawicielu, któremu biłam pokłony i do którego się modliłam, kiedy mnie nikt nie widział. Było mi smutno na myśl o tym, że muszę to wszystko zostawić i w tajemnicy przed wszystkimi zapłakałam.

Miejsce, do którego przybyliśmy, nie miało żadnego ogrodzenia. Dach kryty był strzechą i brakowało także okiennic¹⁴. W oknach wisały sudare¹⁵ i zasłony. Było tam bardzo ładnie: po stronie południowej w dali widać było równinę, a ze wschodu i z zachodu było blisko do morza. Niezwykle pięknie robiło się, gdy opadała wieczorna mgła. Także rano, kiedy już nie spałam, podziwiałam widoki. Było mi smutno stamtąd wyjeżdżać.

年ごろあそびなれつるところを、あらはにこほちちらして、たちさわぎで、日の入りぎはの、いとすぐ霧わたりたるに、車にのるとてうち見やりたれば、人まにはまゐりつゝ額をつきし薬師仏の立ち給へるを、見すてたてまつるかなしくて、人しれずうち泣かれぬ。

かどでしたる所は、めぐりなどもなくて、かりそめの茅屋の、葎などもなし。簾かけ、幕などひきたり。南ははるかに野の方見やらる。東西は海ちかくて、いとおもしろし。夕霧たち渡りて、いみじうをかしければ、朝寝などもせず、かたぐゝ見つゝ、こゝをたちなむこともあはれにかなしきに、

15 dnia tego samego miesiąca, w strugach rześście padającego deszczu przekroczyliśmy granicę prowincji Shimotsusa¹⁶ i na nocleg zatrzymaliśmy się w miejscu zwanym Ikata¹⁷. Lękałam się i nie mogłam spać, ponieważ nieustannie padało, a nasze tymczasowe schronienie wydawało się nieomal dryfować w potokach wody. Na środku równiny, na łagodnym wzniesieniu rosły tam zaledwie trzy drzewa. Kolejny dzień¹⁸ spędziliśmy na suszeniu przemokniętych od deszczu rzeczy oraz w oczekiwaniu na mającą do nas dołączyć grupę ludzi z Kazusa¹⁹.

17 dnia wyruszyliśmy o poranku. Ponoć dawno temu w prowincji Shimotsusa żył człowiek zwany wodzem z Mano²⁰. Przepływaliśmy łodzią rzekę w miejscu, gdzie się znajdowały pozostałości jego rezydencji, w której podobno nakazał raz utkać i wybielić²¹ czterdzieści, albo nawet czterysta tysięcy łokci sukna²². Z rzeki wystawały jeszcze cztery wielkie filary będące pozostałością starej bramy. Wsłuchując się w recytowane przez innych pieśni i ja w myślach ułożyłam jedną:

*Gdyby nie było tutaj tych rzecznych pali – które jeszcze nie
zbutwiały –
jakże mogłabym poznać ślady z zamierzchłych czasów?*

おなじ月の十五日、雨かきくらしふるに、境をいでて、しもつさの国のいかたといふ所にとまりぬ。庵などもうきぬばかりに雨ふりなどすれば、おそろしくていもねられず。野中に丘だちたる所に、たゞ木ぞ三つ立てる。その日は、雨にぬれたる物どもほし、国にたちおくれたる人／＼まつとて、そこに日をくしつ。

十七日のつとめて、立つ。昔、下総の国に、まのしてらといふ人すみけり。疋布を千むら万むらをらせ、さらさせけるが家の跡とて、ふかき河を舟にてわたる。昔の門の柱のまだのこりたるとて、おほきなる柱、河のなかに四つ立てり。人／＼歌よむをきゝて、心のうちに、
朽ちもせぬこの河柱のこらずば昔のあとをいかでしらまし

Owego wieczoru zatrzymaliśmy się w miejscu zwanym plażą Kuroto²³. Na widnokregu rozciągały się góry, a piasek białł się jak okiem sięgnąć wzdłuż linii nadbrzeżnych sosen. Księżyc lśnił niezwykle jasno, a szum wiatru wywoływał poczucie osamotnienia. Oczarowani scenerią, komponowaliśmy pieśni.

*Czy poza dzisiejsza bezsenna nocą
ujrzę jeszcze kiedyś księżyc w jesienny wieczór na plaży
Kuroto?*

Wczesnym porankiem opuściliśmy Kuroto i dotarliśmy do górnego biegu rzeki Futoi²⁴ na granicy prowincji Shimotsusa i Musashi²⁵. Zatrzymaliśmy się w miejscu przeprawy w Matsusato²⁶, skąd przez całą noc przewożono łodzią nasze bagaże.

その夜はくろとの浜といふ所にとまる。片つかたはひろ山なる所の、砂子はるぐとしろきに、松原しげりて、月いみじうあかきに、風の音もいみじう心ぼそし。人々をかしがりて、歌よみなどするに、

まどろまじ今宵ならではいつか見むくろとの浜の秋の夜の月

そのつとめて、そこをたちて、下総の国と武蔵の境にてあるふとゐ河いふが上の瀬、まつさとのわたりの津にとまりて、夜ひとよ、舟にてかつぐ物などわたす。

Moja opiekunka straciła męża, a ponieważ na granicy prowincji przyszło na świat jej dziecko, rozstałyśmy się i do stolicy musiałyśmy jechać osobno. Zażęskniłam za nią i zapragnęłam odwiedzić, więc mój brat zabrał mnie do niej. Nasze schronienie wszyscy zwali tymczasowym, ale tamto miejsce, mimo że dla ochrony przed wiatrem zasunięto zasłony, wobec braku gospodarza wyglądało na opuszczone i zaniedbane. Ona sama okryła się kamizelką o nazwie toma²⁷, zaś na jej czerwonej szacie padały promienie księżyca, przez co wydawała się cierpieć. Jej twarz jawiła się tak piękna i czysta, że nie przypominała samej siebie... Widać było, że jest wzruszona moją obecnością, bo gładząc mnie po włosach płakała. Zrobiło mi się jej żal i nie chciałam jej opuszczać, ale musieliśmy już jechać, więc uczyniłam to z największym żalem. Ten smutek sprawił, że nie byłam nawet w stanie cieszyć się urokiem księżyca i przygnębiona położyłam się spać.

O świcie powozy wciągnięto na łódź i przewieziono je na drugi brzeg, zaś odprowadzający nas ludzie udali się w drogę powrotną. My, podróżujący do stolicy, jeszcze na chwilę zatrzymaliśmy się, a ponieważ rozstawaliśmy się z tamtymi na zawsze, wszyscy żaliliśmy się łzami. Nawet dla młodego serca był to widok wzruszający.

乳母なる人は、おとこなどもなくなして、境にて子うみたりしかば、はなれてべちにのぼる。いとこひしければ、いかまほしく思に、せうとなる人いだきてゐていきたり。みな人は、かりそめの仮屋などいへど、風すくまいく、ひきわたしなどしたるに、これはおとこなんどもそはねば、いと手はなちに、あら／＼しげにて、苦といふ物をひとへうち葺きたれば、月のこりなくさしいりたるに、紅の衣うへにきて、うちなやみてふしたる月かげ、さやうの人にはこよなくすぎて、いとしろくきよげにて、めづらしとおもひてかきなでつゝうち泣くを、いとあはれに見すてがたくおもへど、いそぎゐていかるゝ心地、いとあかずわりなし。おもかげにおぼえてかなしければ、月のけうもおぼえず、くんじふしぬ。

つとめて、舟に車かきすへてわたして、あなたの岸に車ひきたてて、をくりに来つるひとく、これよりみなかへりぬ。のぼるはとまりなどして、行きわかるゝほど、ゆくもとまるも、みな泣きなどす。おさな心地にもあはれに見ゆ。

Potem byliśmy w prowincji Musashi. Nie było tam żadnych ciekawych miejsc. Plażę pokrywał nie biały piasek, lecz coś co przypominało muł. Słyszałam, że równiny Musashi porasta nawrot²⁸, a tu były tylko wysokie trzciny i sitowie²⁹. Rosły tak wysoko, że nie było widać nawet wierzchołków łuków naszych jeźdźców. Przedarłszy się przez gęstwinę, ujrzeliśmy świątynię o nazwie Takeshiba³⁰. W oddali można było dostrzec także pozostałości fundamentów miejsca znanego jako Hahasō³¹. Spytałam, co to za miejsce. Odpowiedziano mi: – Dawno temu to wzgórze zwane było Takeshiba³². Podobno człowieka pochodzącego właśnie stąd wyznaczono kiedyś jako eji³³ do pilnowania ognia w wartowni³⁴ w stolicy. Pewnego razu, kiedy sprzątał pałacowy ogród, tak oto nucił:

*– Ach! Czemuż tak ciężka moja dola? / Siedem i jeszcze trzy
dzbany wina/ Pozostawiłem w mej krainie / I zawieszono jedna
przy drugiej chochle z tykw /Zawieje wiatr z południa, odwracają
się na północ, / Zawieje wiatr z północy, odwracają się na
południe, / Zawieje z zachodu, odwracają się na wschód, /
Zawieje wiatr ze wschodu, odwracają się na zachód. / I tak to już
jest...*

今は武蔵の国になりぬ。ことにをかしき所も見えず。浜も砂子しろくなどもなく、こひちのやうにて、むらさき生ふときく野も、蘆、おぎのみたく生ひて、馬にのりて弓もたる末見えぬまで、たかく生ひしげりて、中をわけゆくに、たけしばといふ寺あり。はるかに、はくさうなどいふ所の、らうの跡のいし多などあり。いかなる所ぞとへば、「これはいにしへ、たけしばといふさか也。国の人のありけるを、火たき屋の火たく衛士にさしたてまつりたりけるに、御前の庭をはくとて、「などやくるしきめを見るらむ。わが国に七三つくりすへたる酒壺に、さしわたしたるひたえのひさごの、南風ふけば北になびき、北風ふけば南になびき、西ふけば東になびき、東ふけば西になびくを見て、かくてあるよ」とひとりごちつぶやきけるを、

W tym czasie w pobliżu przebywała zupełnie sama, skryta za kotarą misu, wychowywana z wielką troską córka Cesarza. Wsparła się ona o kolumnę i ze wzruszeniem przysłuchiwała się jego samotnej pieśni a ponieważ niezmiernie ją interesowało, w jaki sposób owe chochle z tykw się obracają, uniosła kotarę i zawołała:

– Człowieku, zbliż się do mnie! – Mężczyzna z wielkim respektem wypełnił polecenie – Pozwól mi usłyszeć jeszcze raz to, o czym nuciłeś.

Ten ponownie zaśpiewał jej o dzbanach z winem.

– Zabierz mnie tam i pokaż mi je. Mam ku temu swoje powody – rzekła Księżniczka.

Mężczyzna czuł wielką trwogę, czy taki właśnie pisany był mu los, zgodził się jednak opuścić stolicę. Przypuszczał oczywiście, że wyślą za nimi pościg, więc owego wieczoru pozostawił Księżniczkę na drugim brzegu rzeki przy moście Seta³⁶, a sam zniszczył jedno z przęseł mostu. Potem przeskoczył przez zniszczony most i razem wyruszyli w podróż do prowincji Musashi, która miała trwać siedem dni i siedem nocy.

その時、みかどの御むすめ、いみじうかしづかれ給、たゞひとり、御簾のきはにたちいで給て、柱によりかゝりて御覧するに、このをとこのかくひとりごつを、いとあはれに、いかなるひさごの、いかになびくらむと、いみじうゆかしくおぼされければ、御簾を押しあげて、「あのをのこ、こち寄れ」と召しければ、かしこまりて高欄のつらにまいりたりければ、「いひつること、いまひとかへり、われにいひてきかせよ」とおほせければ、酒壺のこといまひとかへり申しければ、「我ゐていきて見せよ。さいふやうあり」とおほせられければ、かしこく、おそろしと思けれど、さるべきにやありけむ、負いたてまつりてくださるに、論なく人をひてくらむと思て、その夜、瀬多の橋のもとに、この宮をすへたてまつりて、瀬多の橋を一間ばかりこほちて、それとびこえて、この宮をかき負いたてまつりて、七日七夜といふに、武蔵の国にいきつきにけり。

Cesarz i Cesarzowa wielce zaniepokojeni zniknięciem Księżniczki zaczęli jej szukać. Mówiono, że sprawcą tego zdarzenia może być pewien wojownik z prowincji Musashi, który, uciekając pośpiesznie, miał zawiązać sobie na szyi wonną tkaninę³⁷. Pytali o niego, ale gdzieś przepadł. Bez wątpienia udał się do rodzimej prowincji. Wyślano pościg z dworu, ale most na Seta był zniszczony i nie można było przezeń przejechać. Do prowincji Musashi dotarli po trzech miesiącach i pytali o mężczyznę. Gdy go znaleźli, Księżniczka tak oto rzekła do wysłanników dworskich:

– Czyż nie tak właśnie było mi pisane? Chciałam zobaczyć dom tego mężczyzny, więc nakazałam mu zabrać mnie do niego, a on to uczynił. Czuję, że będzie mi tu bardzo dobrze. Jeżeli ten mężczyzna zostanie ukarany, co stanie się ze mną? Już w poprzednim życiu musiało zostać ustalone, że moim przeznaczeniem jest pozostawić po sobie ślad w tej prowincji. Wracajcie rychło i oznajmijcie Cesarzowi, co wam przekazałam.

みかど、きさき、皇女うせ給ひぬとおぼしまどひ、もとめ給に、「武蔵の国の衛士のをのこなむ、いと香ばしき物を首にひきかけて、とぶやうににげける」と申しいでて、このをのこをたづぬるに、なかりけり。論なくもとの国にこそゆくらめと、おほやけより使くだりてをふに、瀬多の橋こほれて、えゆきやらず。三月といふに、武蔵の国に往きつきて、このをのこをたづぬるに、この皇女、おほやけの使を召して、「我さるべきにやありけむ、このをのこの家ゆかしくて、ゐてゆけといひしかば、ゐてきたり。いみじくこゝありよくおぼゆ。このをのこ罪しれうぜられば、我はいかでにあれと。これもさきの世に、この国に跡を垂るべき宿世こそありけめ。はやかへりて、おほやけにこのよしを奏せよ」とおほせられければ、

Wysłannicy, nie mogąc wyrazić sprzeciwu, udali się w drogę powrotną do stolicy. Cesarz, poznawszy ich relację, odrzekł:

– Nic zrobić nie mogę. Jeśli bym nawet ukarał mężczyznę, nie przywróci mi to w żadnym razie Księżniczki i nie powróci ona do stolicy. Dopóki mężczyzna z Takeshiba będzie żył, niech obejmie w posiadanie prowincję Musashi, ja zaś zwolnię ją z danin.

Ponieważ Cesarz powierzył Księżniczce zarząd nad prowincją, chata mężczyzny została przebudowana na rezydencję i zamieszkała w niej córka Cesarza. Po śmierci Księżniczki z rezydencji uczyniono świątynię, która zwie się Takeshiba, a dzieci Księżniczki otrzymać miały od nazwy prowincji nazwisko Musashi. Ponoć także od czasu tego właśnie wydarzenia pieczę nad ogniem w wartowni miały sprawować kobiety...

いはむ方なくて、のぼりて、みかどに、かくなむありつると奏しければ、「いふかひなし。そのをどこを罪しても、いまはこの宮をとりかへし、都にかへしたてまつるべきにもあらず。たけしはのをのこに、生けらむ世のかぎり武蔵の国をあづけとらせて、おほやけごともなさせじ、たゞ、宮にその国をあづけたてまつらせ給」よしの宣旨くだりにければ、この家を内裏のごとくつくりて住ませたてまつりける家を、宮などうせ給にければ、寺になしたるを、たけしは寺といふ也。その宮のうみ給へる子どもは、やがて武蔵といふ姓をえてなむありける。それよりのち、火たき屋に女はゐる也」とかたる。

Przechodząc przez góry i równiny, przedzieraliśmy się przez zarośla sitowia i trzciny, aż dotarliśmy do rzeki Asuda³⁸, na granicy prowincji Musashi i Sagami³⁹. To właśnie przy tej przeprawie⁴⁰ Zaigo Chūjō⁴¹ skomponował *Iza kototowamu...*⁴². W zbiorze Chūjō⁴³ rzeka ta nazywała się Sumida. Przejechaliśmy przez nią łodzią i znaleźliśmy się w prowincji Sagami.

Góry w miejscu zwanym Nishitomi⁴⁴ przedstawiały widok niczym na poustawianych obok siebie parawanach z pejzażami namalowanymi wprawną ręką. Z drugiej strony rozciągało się morze, a widok plaży i fal, które przybliżały się i oddalały od brzegu był nadzwyczaj piękny. Dwa lub trzy dni zajęło nam przejście przez obszar zwany Równiną Chińską⁴⁵, po niezwyklej białości piasku.

– Latem pełno tu goździków⁴⁶. Kwitną w różnych kolorach, a równina przypomina wtedy przetykany nimi brokat. Teraz ich nie widać, bo kończy się jesień – powiedział ktoś, ale miejscami i tak widoczne były przywędnięte kwiaty. Wszystkim wydało się interesujące to, że na chińskiej równinie kwitną japońskie goździki.

野山、蘆おぎのなかをわくるよりほかのことなくて、武蔵と相摸との中にゐて、あすだ河といふ、在五中将「いざこと問はむ」とよみけるわたりなり、中将の集にはすみだ河とあり、舟にてわたりぬれば、相模の国になりぬ。

にしとみといふ所の山、絵よくかきたらむ屏風をたてならべたらむやう也。片つかたは海、浜のさまも、よせかへる浪のけしきも、いみじうおもしろし。

もろこしが原といふ所も、砂子のいみじうしろきを二三日ゆく。

「夏は、やまとなでしこの、こく、うすく、錦をひけるやうになむきたる。これは秋の末なれば見えぬ」といふに、猶どころくはうちこぼれつゝ、あはれげにさきわたれり。「もろこしが原に、山となでしこしもさきけむそ」など、ひとくおかしがる。

Przejazd przez przerażające i mroczne góry Ashigara⁴⁷ zajął nam cztery lub pięć dni. Z wiodącej w głąb gór drogi u ich podnóża nie było nawet widać nieba, a niewypowiedziany gąszcz roślinności napawał przemożnym lękiem. Na noc zatrzymaliśmy się u stóp góry. Pośród ciemnej, bezksiężycowej nocy, w mroku, w którym można było stracić orientację, nie wiadomo skąd pojawiły się przed nami trzy wędrowne pieśniarki⁴⁸. Najstarsza z nich miała około pięćdziesięciu lat, młodsza około dwudziestu, a ostatnia liczyła lat czternaście lub piętnaście. Kazano im rozstawić przed chatą parasole i spocząć. Kiedy mężczyźni rozpalili ognisko i można było je ujrzeć, powiedziały nam, że związane są z grupą znaną dawniej jako Kohata⁴⁹. Miały bardzo długie włosy, a grzywki opadały im na białe i czyste policzki, i zachwyciliśmy się nimi, gdyż przypominały służki. Wszyscy je podziwiali. Śpiewały w sposób cudowny, a głosy ich nie miały sobie równych, wznosząc się jakby ku niebu. Oczarowani, zbliżyliśmy się do nich, a ktoś rzekł: „Te z zachodnich krain nie śpiewałyby tak pięknie...”, na co one cudownie odśpiewały: „...jeśliby nas porównać z tymi z Naniwa⁵⁰...”⁵¹. Wyglądały bardzo pięknie śpiewały głosami niepodobnymi do innych, a kiedy już musiały oddalić się w straszliwe góry, wszyscy ze smutku zapłakali. W tym młodym sercu panował jeszcze większy żal na myśl, że musimy opuścić tamto miejsce.

足柄山といふは、四五日かねて、おそろしげに暗がりわたれり。やうく入りたつ麓のほどだに、空のけしきはかぐしくも見えず。えもいはずしげりわたりて、いとおそろしげなり。麓にやどりたるに、月もなく暗き夜の、闇にまどふやうなるに、遊女三人、いづくよりともなく出できたり。五十許なるひとり、二十許なる、十四五なるとあり。庵のまへにからかさをさへせて、すへたり。をのこども、火をともして見れば、昔、こはたといひけむが孫といふ。髪いとながく、額いとよくかゝりて、色しろく、きたなげなくて、「さてもありぬべき下仕などにもありぬべし」など、人くあはれがるに、声すべて似るものなく、空にすみのぼりて、めでたく歌をうたふ。人くいみじうあはれがりて、けぢかくて、人くもて興ずるに、「西国の遊女は、えかゝらじ」などいふをきゝて、「難波わたりにくらぶれば」とめでたくうたひたり。見る目のいときたなげなきに、声さへにるものなくうたひて、さばかりおそろしげなる山中にたちてゆくを、人くあかず思てみな泣くを、おさなき心地には、ましてこやどりをたゝむことさへあかずおぼゆ。

Jeszcze przed świtem przejechaliśmy przez góry Ashigara. Brak mi słów, by wyrazić jak strasznie było w tamtym miejscu.⁵² Pod stopami kłębiły się chmury, tak jakbyśmy po nich stąpali. W samym środku gór, na niewielkiej polanie pośród drzew, rosły trzy kwiaty malwy⁵³. Byliśmy wszyscy wzruszeni odnalazszy je w miejscu tak oddalonym od ludzkich siedzib.

W trzech miejscach po drodze napotkaliśmy na rzeki. Wreszcie przekroczyliśmy góry i na nocleg zatrzymaliśmy się na wzgórzu granicznym. Stamtąd rozciągała się prowincja Suruga⁵⁴. W pobliżu granicy w Yokohashiri⁵⁵ znajdowało się miejsce zwane Skalnym Dżbanem. Z otworu w niebywale ogromnej, czworobocznej skale wypływała chłodna woda niezwyklej czystości.

まだあかつきより足柄をこゆ。まいて山のなかのおそろしげなる事、いはむ方なし。雲は足のしたにふまる。山のなから許の、木のしたのわづかなるに、葵のたゞ三すぢばかりあるを、世はなれて、かゝる山中にしも生ひけむよと、人々あはれがる。水はその山に三所ながれたる。

からうじてこえいでて、関山にとゞまりぬ。これよりは駿河也。よこはしりの関のかたはらに岩壺といふ所あり。えもいはずおほきなる石の四ほうなる中に、穴のあきたる中よりいづる水の、きよくつめたきことかぎりなし。

W tej prowincji znajduje się góra Fuji. To tę właśnie górę można było dostrzec daleko na zachodzie z krainy, w której się wychowałam. Nie ma na świecie drugiej góry do niej podobnej. Wyglądała jak pomalowana na szarogranatowo, a ponieważ leżał na niej śnieg, który nigdy nie topnieje, wydawała się nosić fioletową szatę i białe akome⁵⁶. Z lekko spłaszczonego wierzchołka unosił się dym⁵⁷, a wieczorem widać było buchające płomienie.

Punkt kontrolny w Kiyomi⁵⁸ położony jest nad morzem. Jest tam kilka zabudowań granicznych, a do morza dochodzi parkan⁵⁹. Gęsta mgiełka⁶⁰ znad morza wskazywała na wysokie fale. Był to niezmiernie piękny widok.

Przez wysokie fale w Tagonoura⁶¹ przeprawiliśmy się wiosłując. Znaleźliśmy się na brzegu rzeki Ōi⁶². To rzeka niezwykła, gdyż szybkim nurtem płynie w niej biała, jakby gęsta od mączki ryżowej woda.

富士の山はこの国也。わが生いいでし国にては、西をもてに見えし山也。その山のさま、いと世に見えぬさまなり。さまことなる山のすがたの、紺青をぬりたるやうなるに、雪の消ゆる世もなくつもりたれば、色こき衣に、しろき柏きたらむやうに見えて、山のいたゞきのすこし平ぎたるより、けぶりはたちのぼる。夕暮は、火のもえ立も見ゆ。

清見が関は、片つかたは海なるに、関屋どもあまたありて、海までくぎぬきしたり。けぶりあふにやあらむ、清見が関の浪もたかくなりぬべし。おもしろきことかぎりなし。田子の浦は、浪たかくて、舟にてこぎめぐる。

大井河といふわたりあり。水の世のつねならず、すり粉などを濃くてながしたらむやうに、しろき水、はやくながれたり。

Rzeka Fuji⁶³ spływa z góry Fuji. Mieszkaniec tutejszej prowincji opowiedział nam następującą historię:

–Rok temu szedłem w pewne miejsce, a ponieważ było bardzo gorąco, postanowiłem odpocząć w pobliżu tej rzeki. Spostrzegłem, że z prądem płynie żółty przedmiot, który zahaczył o coś i zatrzymał się. Okazało się, że była to kartka. Podniosłem ją i zobaczyłem, że żółta kartka jest zapisana elegancko cynobrem. Zdziwiony, spróbowałem ją odczytać. Była to jakby lista osób, które miały być mianowane na stanowiska zarządców⁶⁴, jakie zwolnić się miały w następnym roku w prowincji Suruga. Do jednego z tych nazwisk dopisano obok inne nazwisko. Byłem zaskoczony tą dziwną treścią, toteż wysuszyłem kartkę i zachowałem ją. W następnym roku, kiedy powołano nowego zarządcę, treść kartki spełniła się bez jednego wyjątku. Człowiek, który został zarządcą prowincji, trzy miesiące później nie żył, a jego następcą została osoba, której nazwisko dopisano obok. Taka oto niezwykła historia mi się przytrafiła. Pomyślałem, że to liczne bóstwa, które w tym roku zebrały się na Fuji, zdecydowały o tym. To naprawdę przedziwne zdarzenie!

富士河といふは、富士の山より落ちたる水也。その国の人の出でてかたるやう、「ひととせごろ、物にまかりたりしに、いと暑かりしかば、この水のつらにやすみつゝ見れば、河上の方より黄なる物ながれきて、物につきてとゞまりたるを見れば、反故なり。とりあげて見れば、黄なる紙に、丹して、濃くうるわしくかゝれたり。あやしくて見れば、来年なるべき国どもを、除目のごとみなかきて、この国来年あくべきにも、守なして、おさめたりしを、かへる年の司召に、この文にかゝれたりし、ひとつたがはず、この国の守とありしまゝなるを、三月のうちになくなりて、又なりかはりたるも、このかたはらにかきつけられたりし人なり。かゝる事なむありし。来年の司召などは、今年、この山に、そこばくの神／＼あつまりて、ない給なりけりと見給へし。めづらかなる事にさぶらふ」とかたる。

Spokojnie przeszliśmy przez miejsce zwane Numashiri⁶⁵, jednak gdy zbliżaliśmy się do prowincji Tōtōmi⁶⁶ strasznie się rozchorowałam. Nie pamiętam, jak przekroczyliśmy górę Sayanonaka⁶⁷. Byłam wyczerpana do tego stopnia, iż nad brzegiem rzeki Tenryū⁶⁸ przygotowano tymczasowe schronienie, gdzie przez dobre kilka dni powoli dochodziłam do siebie. Zima trwała już w pełni, a porywisty wiatr znad rzeki był nie do zniesienia.

Przekroczywszy rzekę, dotarliśmy do mostu Hamana⁶⁹. Był on zbudowany z drewnianych bali, gdy przejeżdżaliśmy przez to miejsce w drodze ze stolicy⁷⁰. Teraz jednak nie było po nim śladu, więc cieśninę musieliśmy przepłynąć łodzią. Morze było niezwykle wzburzone, fale wysokie, a mielizny u ujścia cieśniny wydawały się pozbawione życia. Jedyne gęste sosny, za sprawą fal, które to przybliżały się, to znowu oddalały, wydawały się błyszcząc niczym wielorakie klejnoty, tak jakby rzeczywiście owe fale przelewały się przez ich wierzchołki. Stanowiło to widok ze wszech miar interesujący.

沼尻といふ所もすがくとすぎて、いみじくわづらひいでて、遠江にかゝる。さやの中山など、こえけむほどもおぼえず。いみじく苦しければ、天ちうよいふ河のつらに、飯屋つくりまうけたりければ、そこにて日ごろすぐるほどにぞやうくをこたる。冬ふかくなりたれば、河風けはしくふきあげつゝ、たえがたくおぼえけり。

そのわたりして、浜名の橋についたり。浜名の橋、くだりし時は黒木をわたしたりし、このたびは跡だに見えねば、舟にてわたる。入江にわたりし橋也。外の海は、いといみじくあしく、浪たかくて、入江のいたづらなる州どもに、こと物もなく、松原のしげれるなかより、浪のよせかへるも、いろく玉のやうに見え、まことに、松の末より浪はこゆるやうに見えて、いみじくおもしろし。

Dalej wchodziliśmy na wzgórze Inohana⁷¹, którego widok przepełniał serce niewypowiedziny smutkiem⁷², aż dotarliśmy do plaży Takashi⁷³ w prowincji Mikawa⁷⁴.

Po Ośmiu Mostach⁷⁵ nie pozostało już nic poza nazwą. Nie było tam ani mostów, ani niczego ciekawego do obejrzenia.

Tamtą noc, na którą zatrzymaliśmy się w górach Futamura⁷⁶, spędziliśmy w skromnej chacie zbudowanej pod ogromnym drzewem hebanowca⁷⁷. Przez całą noc jego owoce spadały na dach chaty, a wszyscy je zbierali. Kiedy przekraczaliśmy górę Miyaji⁷⁸, klony wciąż jeszcze były pokryte liśćmi, mimo iż był to koniec 10 miesiąca.

*Na górze Miyaji, tej, na której nie wieją żadne
wichry,
Liście na klonach wciąż jeszcze pozostają...*

To ciekawe, ale do pewnego stopnia obawialiśmy się przeprawy w Shikasuga⁷⁹ na granicy prowincji Mikawa i Owari⁸⁰.

それよりかみは、ゐのはなといふ坂の、えもいはずわびしきをのぼりぬれば、三河の国のたかしの浜といふ。八橋は名のみして、橋の方もなく、なにの見所もなし。ふたむらの山の中のとまりたる夜、おほきなる柿の木のしたに、庵をつくりたれば、夜ひとよ、庵の上に柿の落ちかゝりたるを、人／＼ひろひなどす。宮路の山といふ所こゆるほど、十月つごもりなるに、紅葉ちらでさかりなり。

嵐こそふきこざりけれ宮路山までもみぢ葉のちらでにこれる

参河と尾張となる、しかすがのわたり、げに思わづらひぬべくおかし。

Kiedy w Owari przejeżdżaliśmy wzdłuż wybrzeża Narumi⁸¹, zbliżał się wieczorny przypływ. Mieliśmy zamiar zatrzymać się tam po drodze na nocleg, jednak z powodu wysokiego przypływu, nie wiedząc, czy uda nam się przejechać, czym prędzej oddaliliśmy się stamtąd.

Granicę prowincji Mino⁸² przekroczyliśmy w Sunomata⁸³ i dotarliśmy do miejsca zwanego Nogami⁸⁴. Przybyły tam także wędrowne pieśniarki, które i tym razem śpiewały przez całą noc. Przypomnieliśmy sobie te, które spotkaliśmy w górach Ashigara i wszyscy za nimi zatęskniliśmy.

Pośród śniegu, w burzy, z powodu której nic nie było widać, przekraczyliśmy granicę w Fuwa⁸⁵ i górę Atsumi⁸⁶. W prowincji Ōmi⁸⁷ zatrzymaliśmy się na cztery lub pięć dni w domu człowieka o imieniu Okinaga⁸⁸.

尾張の国、鳴海の浦をすぐるに、夕潮たゞみちて、今宵やどらむも中間に、潮みちきなば、こゝをもすぎじと、あるかぎり、はしりまどひすぎぬ。

美濃の国になる境に、墨俣といふわたりして、のがみといふ所につきぬ。そこに遊女どもいできて、夜ひとよ、歌うたふにも、足柄なりし、思いでられて、あはれにこひしきことかぎりなし。雪ふり、あれまどふに、ものの興もなく、不破の関、あつみの山などこえて、近江国、おきながといふ人の家にやどりて、四五日あり。

U podnóża góry Mitsusaka⁸⁹ przez cały dzień i noc padał deszcz z gradem i nie pojawił się nawet promyk słońca, co było niezwykle przygnębiające.

Po wyruszeniu w dalszą drogę przejeżdżaliśmy jeszcze przez Inukami⁹⁰, Kamuzaki⁹¹, Yasu⁹², Kurumoto⁹³ oraz wiele innych miejsc.

Urzekający był widok rozciągającej się w dal tafli jeziora⁹⁴ oraz wysp zwanych Nadeshima⁹⁵ i Chikubushima⁹⁶. Z trudem przeprawiliśmy się przez most Seta, gdyż prawie się zapadł.

Zatrzymaliśmy się w Awazu⁹⁷ i 2 dnia 12 miesiąca wjechaliśmy do stolicy. Aby móc dotrzeć do miasta po zapadnięciu zmroku⁹⁸, z Awazu wyruszyliśmy w porze Małpy⁹⁹. Zbliżając się do punktu kontrolnego¹⁰⁰ na zboczu góry zauważyliśmy sklecone z desek ogrodzenie. Sponad niego można było dostrzec jedynie twarz nieukończonoego jeszcze pięciometrowego¹⁰¹ posagu Buddy¹⁰². Przejechaliśmy obok, z dala przyglądając się osamotnionemu, oddalonemu od ludzkich siedlisk Buddzie, który dostojnie trwał na swoim miejscu.

Przemierzyliśmy wiele krain, ale punkt graniczny w Kiyomi w prowincji Suruga i ten tutaj, w Ōsaka nie miały sobie równych. Panował już mrok, gdy przybyliśmy do miejsca w Trzecim Kwartale¹⁰³, gdzie znajdowała się rezydencja Księżniczki¹⁰⁴.

KONIEC CZĘŚCI I

みつさかの山の麓に、よるひる、しぐれ、あられふりみだれて、日のひかりもさやかならず、いみじう物むつかし。

そこをたちて、犬上、神崎、野洲、粟太などいふ所へ、なにとなくすぎぬ。水うみのおもて、はるくとして、なで島、竹生島などいふ所の見えたる、いとおもしろし。勢多の橋、みなくづれて、わたりわづらふ。

栗津にとどまりて、師走の二日、京に入る。暗くいきつくべくと、申の時許にたちてゆけば、閑ちかくなりて、山づらに、かりそめなるきりかけといふ物したる上より、丈六の仏の、いまだあらづくりにおはするが顔ばかり見やられたり。あはれに、人はなれて、いづこともなくおはする仏かなど、うち見やりてすぎぬ。

こゝらの国へをすぎぬるに、駿河の清見が関と、相坂の関とばかりはなかりけり。いと暗くなりて、三条の宮の西なる所につきぬ。

Przypisy / Footnotes / 脚注

¹ Ojciec autorki, Sugawara Takasue 菅原孝標 w 1 roku ery Kannin 寛仁 (1017 A. D.), w wieku 49 lat, został zastępcą zarządcy prowincji Kazusa 上総 (dziś prefektura Chiba 千葉県), toteż autorka przez 4 lata (do 13 roku życia) przebywała z dala od stolicy.

² Wyrażenie: *Azumaji no michi no hate* ‘kraniec traktu na wschód/do wschodnich [krain]’ jest prawdopodobnie parafrazą słów zaczerpniętych z powieści *Genji monogatari* 『源氏物語』 (*Opowieść o księciu Genji*, 1008 A. D.) Murasaki Shikibu. Mogło ono także być inspirowane wierszem autorstwa Ki no Tomonori 紀友則 (?-907 A. D.), umieszczonym w antologii 『新古今和歌集』 *Shin kokin wakashū* (*Nowy zbiór pieśni dawnych i dzisiejszych*, 1205) pozycja 1057.

³ Promienisty Genji – główny bohater powieści *Genji monogatari*. W roku urodzin autorki *Sarashina nikki*, tj. ok. 1008 A. D., powieść była już ukończona i znana szerokiemu gronu czytelników.

⁴ Rodzona siostra autorki.

⁵ Córka Takashiny Shigeyukiego 高階成行 – wysokiego urzędnika 4 rangi, który administrował wszystkimi sprawami dotyczącymi następcy tronu. Po powrocie do stolicy macocha rozstała się z Takasue; służyła na dworze cesarza Goichijō 後一条天皇 (1016-1036 A. D.) i zaczęła tworzyć poezję.

⁶ Jap. 薬師仏 *Yakushibutsu*, skr. *Bhaishajyaguru*; jedna z najpopularniejszych postaci japońskiego buddyzmu mahajanistycznego, czczona szczególnie intensywnie w okresie Nara (710-794 A. D.).

⁷ Zazwyczaj rzeźba taka miała wysokość 5 *shaku*, czyli ok. 1,52m (1 尺 *shaku* = 30,305 cm), ale zdarzało się, że wysokość dopasowywano do wzrostu właściciela.

⁸ 4 rok ery 寛仁 (1020 A. D.)

⁹ Zarządca prowincji po upływie czteroletniej kadencji powracał do stolicy.

¹⁰ Długi Księżyc – tradycyjna nazwa dziewiątego miesiąca w kalendarzu księżycowym.

¹¹ Prawdopodobnie nazwa bliżej nieokreślonej miejscowości, która mogła znajdować się terenie dzisiejszego Umatate 馬立, w mieście Ichihara 市原市, w prefekturze Chiba. Nazwę kojarzyć można także z rzeczownikiem *imatachi* 今館, który oznacza ‘nowo wybudowaną rezydencję’.

¹² W oryginale pojawia się czasownik *kohotsu* 毀つ, czyli ‘psuć, niszczyć’. Dotyczy on wynoszenia sprzętów z opuszczanego domu.

¹³ W oryginale: *kuruma* 車. W okresie Heian było to przeważnie określenie powozu ciągniętego przez woły. Powozy takie, przeznaczone głównie dla arystokracji, występowały w kilku rodzajach.

¹⁴ Próba przekładu terminu: *shitomi* 葺. Były to drzwi wykonane z desek umocowanych od zewnątrz na czarnej kratownicy, które chroniły przed deszczem, wiatrem, czy nadmiernym nasłonecznieniem. Większość z takich okiennic składała się z dwóch części: dolnej, przymocowanej na stałe, oraz górnej, z wyjmowaną deską.

¹⁵ *Sudare* 簾 to rodzaj szorstkiej maty plecionej z cienkich włókien bambusa lub trzciny, używanej do przepierzenia pomieszczeń lub jako osłona przed słońcem; często kobiety, by unikać wzroku mężczyzn, siedziały za takimi zasłonami; pozostawały wówczas niewidoczne z zewnątrz, choć same mogły widzieć wszystko.

¹⁶ Obszar dzisiejszych pref. Chiba i Ibaraki 茨城県.

¹⁷ W innej wersji: Ikeda 筏. Nie wiadomo, czy chodzi o miejscowość Ikeda 池田, czy teren w obrębie dzisiejszego miasta Chiba, nazywany dawniej Ikeda-kyō 池田郷.

¹⁸ 16 dzień 9 miesiąca kalendarza księżycowego.

¹⁹ Ważne osobistości podróżowały z licznym orszakiem, składającym się z uzbrojonych jeźdźców, piechurów a także wyznaczonych do różnych zadań służących. W tamtych czasach podróż do stolicy musiała zajmować około 3 miesięcy.

²⁰ Woryginalne: *mano no chō* (można odczytywać także: *mano shitera*), choć znaczenie nazwy jest niewyjaśnione. Pierwszy wyraz tej frazy (*mano*) w wersji dialektalnej odpowiada *hamano*, czyli nazwie okolicy dzielnicy Hamano 浜野 w mieście Chiba, natomiast *chō* prawdopodobnie oznacza przywódce, wodza.

²¹ W epoce Heian w celu wybielenia płótna bawelnianego lub lnianego gotowano je najpierw w ługu, potem płukano w wodzie, a następnie wystawiano na słońce.

²² Woryginalne mowa o tysiącu i dziesięciu tysiącach *hiki*. *Hiki* było jednostką używaną do mierzenia długości sukna, jedwabnych materiałów itp.; 1 *hiki* = 5 *jō* 6 *shaku*, czyli w sumie około 21m. W przekładzie posłużono się dawną polską jednostką długości – łokciem, równą ok. 0,5 m.

²³ Nie sposób podać dokładnej lokalizacji tego miejsca. Być może chodzi tu o plażę w pobliżu ujścia rzeki Obitsu 小櫃川 w prefekturze Chiba.

²⁴ Dzisiejsza rzeka Edo 江戸川. W rzeczywistości w tamtej okolicy granicę Shimofusa i Musashi stanowiła dzisiejsza rzeka Sumida 隅田川, co może świadczyć o pomyłce autorki.

²⁵ Obszar prowincji Musashi 武蔵 to obecnie głównie okręg stołeczny Tōkyō 東京都 i prefektura Saitama 埼玉県.

²⁶ Obecnie Matsudo 松戸市, miasto w prefekturze Chiba.

²⁷ *Toma* 苫 to rodzaj narzutki przypominającej słomianą matę tkanej głównie z turzycy i miskanta japońskiego.

²⁸ Nawrot lekarski (*Lithospermum officinale* var. *erythrorhizon*), jap. *murasaki* 紫草, to bylina należąca do rodziny ogórecznikowatych (Boraginaceae), wysokości 50-60 cm, kwitnąca na biało w połowie czerwca. Cenna szczególnie ze względu na korzenie, z których ekstrahowano purpurowy barwnik, tzw. *edomurasaki* 江戸紫. Na potrzeby dworu w czasach, kiedy czerwień *murasaki* uznawana była za najpiękniejszą i najbardziej reprezentatywną dla arystokracji barwę, uprawiana była w specjalnych ogrodach zwanych *murasakien* 紫園; wykorzystywana także w medycynie. W naturze roślina ta porastała prowincję Musashi, więc region ten uchodził za główny obszar jej uprawy. O roślinie wzmiankowano już w najstarszych antologiach np. w 867 pieśni w *Kokinshū*; oto tekst wiersza: *Murasaki no hitomoto yue ni Musashino no kusa wa minagara, aware to zo miru*, „Jakże wzruszający jest widok wszystkich traw na równinie Musashi!... i to z powodu jednego kwiatu nawrotu.”

²⁹ Ówczesny obszar Musashi był bagnisty, stąd roślinność terenów podmokłych.

³⁰ Pozostałości tej świątyni znajdują się dzisiaj w Tōkyō, w dzielnicy Minato 港区.

³¹ Znaczenie nazwy niewyjaśnione. Możliwa pomyłka w tekście.

³² Dziś Shibaura 芝浦, w tokijskiej dzielnicy Minato.

³³ Wojownicy wybierani z prowincji na roczną służbę na dworze.

³⁴ *Hitakiya* 火たき屋 to wartownie w obrębie dworu cesarskiego, w których specjalni wojownicy (*ejī* 衛士) pilnowali ognia.

³⁵ *Misu* 御簾 to bardziej wyszukany rodzaj *sudare* (por. przypis 15) używany na dworze lub w chramach shintoistycznych.

³⁶ Most zawieszony nad rzeką Seta 勢田川, która wypływa z południowej części jeziora Biwa 琵琶湖 w dzisiejszej prefekturze Shiga 滋賀県, około 13 km od Kyōto.

³⁷ W okresie Heian stroje kobiet z arystokracji były perfumowane.

³⁸ Chodzi prawdopodobnie o rzekę Sumida, gdyż to jej dawna nazwa brzmiała Suda. Zmiana w nazwie rzeki może wynikać z pomyłki w tekście.

³⁹ Prowincja Sagami 相模 obejmowała w większości dzisiejszą pref. Kanagawa 神奈川県.

⁴⁰ W *Ise monogatari* 『伊勢物語』 (*Opowieści z Ise*, X w.) rzeka Sumida przedstawiona jest jako rzeka graniczna między prowincjami Musashi i Shimofusa. Ariwara no Narihira o rzece Sumida wspomina także w wierszu zamieszczonym w *Kokinshū*; dokładne określenie położenia rzeki znajdujemy w opisie okoliczności powstania pieśni 410, zwój 6: *Musashi to Shimotsufusa no kuni to no naka ni aru Sumida-gawa no hotori ni itarite...*, „Dotarliśmy w okolicę rzeki Sumida położonej pomiędzy prowincjami Musashi i Shimofusa”. Może to być pomyłka w tekście oryginalnym lub też wstawka dokonana przez kogoś, kto odziedziczył manuskrypt, a posiadał powierzchowną wiedzę literacką.

⁴¹ W oryginale zapisie: 在五中将; mowa o znanym poecie Ariwara no Narihira 在原業平 (825-880), który nosił właśnie taki przydomek, o znaczeniu dosł.: ‘piąty syn, dowódca [stopnia] średniego’. Był on 5 synem księcia krwi Abo 阿保 – syna cesarza Heizeia 平城天皇 (806-809 A. D.) – oraz córki cesarza Kammu 桓武天皇 (781-806 A. D.). Wraz ze starszym bratem otrzymał nazwisko Ariwara i został wyłączony z rejestrów rodziny cesarskiej. Tytuł *chūjō* 中将 oznaczał stopień wojskowy w urzędzie *Ukon Efu* 右近衛府 (‘prawa najbliższa straż przyboczna’); stanowiła ona jeden z 6 oddziałów *Efu* (‘[cesarskiej] straży przybocznej’).

W *Kanajo* 「仮名序」, czyli *Przedmowie do Zbioru pieśni dawnych i dzisiejszych*, Ariwara zaliczony został do Sześciu Mistrzów Poezji (*Rokkasen* 六歌仙). Właśnie m.in. w tym zbiorze zachowało się 30 wierszy tego poety. Więcej na temat twórczości Ariwara no Narihira zob.: Mikołaj Melanowicz, *Literatura japońska*, t. 1, *Od VI do połowy XIX wieku*, Wydawnictwo Naukowe PWN, Warszawa 1994, s. 132-134.

⁴² Utwór ten odnaleźć można zarówno w *Kokinshū* (wiersz 411), jak też w *Ise monogatari*. Poemat adresowany jest, jak się przypuszcza, do mewy śmieszki (*Larus ridibundus*), zwanej prawdopodobnie w starojapońskim *miyakodori* 都鳥 (dosł. ‘ptak [ze] stolicy), a współcześnie *yuri kamome* ユリカモメ.

Na ni shi owaba *iza koto towamu miyakodori*, *waga omou hito wa ari ya nashi wa*

「名にし負はばいざこととはむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」

„Skoro nosisz takie imię, ptaku ze stolicy, czy mogę cię spytać, jak się ma moja ukochana?” (Podkreślenie wskazuje fragment przytoczony przez autorkę).

Jak można dowiedzieć się z opisu genezy tego wiersza (tzw. *kotobagaki* 詞書), powstał on, gdy Ariwara wraz ze swoimi towarzyszami przekraczał rzekę Sumida. Ujrzał wtedy nad brzegiem białego ptaka z czerwonym dziobem i czerwonymi nogami, i jak się

dowiedział od właściciela łodzi, był to właśnie *miyakodori*.

⁴³ Fraza ta mógłaby wskazywać na dzieło *Narihira ason shū* 『業平朝臣集』 (*Antologia dworzanina Narihiry*), lub na *Ise monogatari*.

⁴⁴ W miejscu tym, niedaleko miasta Fujisawa 藤沢市 w prefekturze Kanagawa, rozciąga się pasmo wysokich gór, z których widoczny powinien być szczyt Tanzawa 丹澤山. Mimo że w tekście wzmiankuje się o Nishitomi 西富, w rzeczywistości chodzić może o inne miejsce, w okolicy miasta Hiratsuka 平塚市. Stamtąd można zobaczyć m.in. górę Koma 高麗山.

⁴⁵ Dosłowne tłumaczenie nazwy *Morokoshigahara*. Jako *Morokoshi* 唐 Japończycy w okresie Nara i późniejszych określali głównie Chiny. Ideogram 唐 odczytuje się *kara*, co oznacza zarówno Chiny jak i Koreę, lub ogólnie kraje zamorskie; inne czytanie brzmi *tō* stanowiąc nazwę chińskiej dynastii Tang (618-907 A. D.).

⁴⁶ *Dianthus spec.*, jap. *nadeshiko* 撫子 – bylina o kwiatach w różnych odcieniach czerwieni; kwitnie od końca lipca do września. Mowa o goździku japońskim (*Dianthus japonica*), jap. *yamato nadeshiko* 大和撫子: nazwa używana w przeciwieństwie do goździka chińskiego, *Dianthus chinensis*, jap. *kara nadeshiko* 唐撫子.

⁴⁷ Pasma górskie na granicy prowincji Sagami 相模 i Suruga 駿河. W części południowo-wschodniej znajduje się góra Hakone 箱根山. Ówczesnie trakt Tōkaidō 東海道 nie przebiegał przez Hakone i konieczne było przejście przez góry.

⁴⁸ *Asobi* 遊女 (czyt. także jako: *asobime*, *yūjo*) – dosł.: ‘kobiety do zabawy’, kobiety, które przemieszczały się pieszo lub łodziami u wybrzeży morza, zabawiając napotkanych podróżnych tańcem i śpiewem; często trudniły się także prostytutką. Zob.: Janet R. Goodwin 2000. “Shadows of Transgression: Heian and Kamakura Constructions of Prostitution”, *Monumenta Nipponica*, Vol. 55, Nr 3, Tokyo: Sophia University, s. 327-368.

⁴⁹ Możliwe, że chodzi tu o region zwany Kobata 木幡, słynny także z *asobi*.

⁵⁰ Dawna nazwa dzisiejszego miasta Ōsaka 大阪市. Śpiewaczki nawiązują tu do Naniwy 難波, gdyż to właśnie tamtejsze *asobi* były najsłynniejsze. W pobliżu dzisiejszej Ōsaki znajdował się obszar zwany Eguchi 江口, gdzie do rzeki Yodo 淀川 wpadała rzeka Kanzaki 神崎川, w średniowieczu niezwykle ożywiony region handlowy, dokąd zawijały statki z zachodu i łodzie rzeczne. Miejsce to słynęło także z *asobi*.

⁵¹ Zapewne ostatni wers pieśni z gatunku *imayō* 今様 (gatunek japońskiej poezji melicznej z repertuaru kurtyzan i wędrownych śpiewaków), być może wykonanej przez śpiewaczki.

⁵² Strach powodowany był zapewne obawami przed złymi duchami bądź rabusiami.

⁵³ Malwa (*Alcea sp.*), jap. *aoi* 葵 – rodzaj byliny z rodziny ślazowatych (*Malvaceae*), występujących głównie w południowo-zachodniej i środkowej Azji.

⁵⁴ Obecnie znaczna część pref. Shizuoka rozciągająca się na wschód od rzeki Ōi po granicę pref. Kanagawa za wyłączeniem płw. Izu 伊豆.

⁵⁵ Być może chodzi tu o okolice dzisiejszego miasta Oyama 小山市 w prefekturze Shizuoka 静岡県, gdzie podobno znajdowała się miejscowość Yokohashiri 横走郷. Nie wiadomo jednak, czy była to właśnie owa miejscowość graniczna.

⁵⁶ *Akome* 袖 to rodzaj noszonej na co dzień koszuli o szerokich rękawach, którą wkładano do *hakama* 袴 (rodzaj długiej spódnicy, wiązanej na wysokości klatki piersiowej).

⁵⁷ W okresie powstawania *Sarashina nikki* wulkan Fuji musiał być ponownie aktywny. Wcześniej jednak, np. zgodnie z informacjami zawartymi w *Nihongi* 『日本記』 (kronika japońska, 720 A. D.) oraz w okresie kompilacji *Kokin wakashū*, góra Fuji była wulkanem nieczynnym. O braku jego aktywności pisał nawet Ki no Tsurayuki, por. *Kanajo*, czyli przedmowa do *Kokinshū*, przekład Krzysztof Olszewski, [w:] *Japonica*, nr 13, Zakład Japonistyki i Koreanistyki UW, Warszawa 2000, s. 169). Podobne nawiązania można odnaleźć w wierszach 534 i 1028 antologii *Kokinshū*.

⁵⁸ Obecnie w miejscu tym znajdują się pozostałości świątyni Seiken 清見寺 położonej w Shimizu 清水市, części miasta Shizuoka.

⁵⁹ Ogrodzenie zbite z desek lub pali, połączonych poziomo długą deską.

⁶⁰ Fragment ten jest nie do końca jasny. Może tu chodzić o wzajemne przywoływanie się mgiełki morskiej i dymu wydobywającego się z góry Fuji, gdyż to z jej dymem bezpośrednio kojarzy się fabuła. Inna teoria mówi, że to dym unoszący się nad chatami granicznymi łączył się z morską mgiełką.

⁶¹ Nazwa plaży w Kanbara 蒲原 w okręgu Ihara 庵原郡, prefektura Shizuoka, obecnie znajdującej się na wschód od ujścia rzeki Fuji. Dawniej była to plaża po zachodniej stronie ujścia, na północny-wschód od Okitsu 興津.

⁶² Rzeka na granicy prowincji Suruga i Tōtōmi.

⁶³ Jest to nieścisłość, gdyż na górze Fuji nie ma źródła żadnej rzeki. Rzeka Fuji bierze swój początek na Kobushigatake 甲武信岳, na północny wschód od miasta Kōfu 甲府市 w prefekturze Yamanashi.

⁶⁴ Począwszy od okresu Heian, co cztery lata na początku roku odbywała się ceremonia nadawania urzędów *jimoku* 除目. Zarządcy pełniący służbę w stolicy zwani byli *tsukasameshi* 司召し, ci z prowincji – *agatameshi* 県召し.

⁶⁵ Brak udokumentowania takiego miejsca.

⁶⁶ Prowincja Tōtōmi obejmowała zachodnią część dzisiejszej prefektury Shizuoka.

⁶⁷ Góra znajdująca się między Nitsusaka 日坂 w obrębie miasta Kakegawa 掛川市 a Kikugawa 菊川 w miejscowości Kanaya 金谷町 w prefekturze Shizuoka. Nawiązaniem do tej góry jest 594 wiersz antologii *Kokinshū*.

⁶⁸ Tenryūgawa 天龍川 to rzeka mająca swoje źródło w jeziorze Suwa 諏訪湖 w prefekturze Nagano 長野県.

⁶⁹ Dawniej jezioro Hamana 浜名湖 połączone było z morzem wąską cieśniną o tej samej nazwie, dlatego w tekście mowa o moście. *Sandai jitsuroku* 『三代実録』 (Wierne zapiski trzech pokoleń) – ostatnia japońska kronika historyczna w języku chińskim (901 A. D.) – podaje wymiary mostu Hamana: długość 56 *jō* (=169,68m), szerokość 1 *jō* 3 *shaku* (ok. 3,94m), wysokość 1 *jō* 6 *shaku* (ok. 4,85m). Z powodu częstych zniszczeń most był wielokrotnie odbudowywany.

⁷⁰ Gdy Sugawara Takasue został mianowany zastępcą zarządcy (por. przyp. 1).

⁷¹ W oryginale: 猪鼻 (dosł. ‘ryj dzika’), być może chodzi tu o wzgórze Shiomi 潮見坂 w okolicy miasta Arai 新居町 i Shirasuga 白須賀町 w okręgu Hamano 浜野郡 w prefekturze Shizuoka.

- ⁷² Zimowa panorama ze wzgórza Shiomi na morze oraz na półwysep Atsumi 渥美半島 wywoływać musiała poczucie przygnębienia.
- ⁷³ Plaża na południe od miasta Toyohashi 豊橋市 w okręgu Atsumi 渥美 w prefekturze Aichi 愛知県.
- ⁷⁴ Prowincja Mikawa 三河 rozciągała się od dzisiejszej granicy prefektury Shizuoka na zachód, za rzekę Yahagi 矢作川.
- ⁷⁵ Prawdopodobnie chodzi tu o okolice miasta Chiryū 知立市 w okręgu Hekikai 碧海郡 w prefekturze Aichi. O miejscu tym wzmiankowano np. w 9 opowieści *Ise monogatari*.
- ⁷⁶ Góry w okręgu Nukada 額田郡 w prefekturze Aichi.
- ⁷⁷ Hebanowiec wschodni, (*Diospyros kaki*), jap *kaki* 柿, to drzewo z rodziny hebankowatych (Ebenaceae), zrzucające liście, wysokości ok. 15m; owoce okrągławe, wielkości ok. 8cm o barwie pomarańczowej. Pochodzi z Chin i Japonii.
- ⁷⁸ Góra w okręgu Hoi 宝飯郡 w prefekturze Aichi.
- ⁷⁹ Przeprawa u ujścia rzeki Toyo 豊川; nie było to jednak na granicy prowincji Mikawa i Owari.
- ⁸⁰ Dawniej prowincja rozciągająca się na wschód od rzeki Hida 肥田川 po obszar na zachód od rzeki Yahagi w dzisiejszej prefekturze Aichi.
- ⁸¹ Okolice miejscowości Narumi 鳴海町 u ujścia rzeki Tenpaku 天白川.
- ⁸² Południowa część dzisiejszej prefektury Gifu 岐阜県.
- ⁸³ Obecna miejscowość Sunomata 墨俣町 w okręgu Anpachi 安八郡, gdzie na prawym brzegu rzeki Nagara 長良川 znajdowała się wspomniana przeprawa.
- ⁸⁴ Prawdopodobnie okolica pomiędzy miejscowościami Sekigahara 関ヶ原郡 a Tarui 垂井郡 w okręgu Fuwa 不破郡, w południowo-zachodniej części prefektury Gifu. Miejsce znane z *asobi*.
- ⁸⁵ Pozostałości dawnej granicy koło Sekigahary. Jeden z trzech posterunków kontrolnych.
- ⁸⁶ Lokalizacja tej góry jest niewyjaśniona.
- ⁸⁷ Obecna prefektura Shiga.
- ⁸⁸ Uważa się, że jest to nazwisko rodziny zamieszkującej dawną wioskę Okinaga 息長村, (dzisiejsze miasteczko Ōmi 近江町), w okręgu Sakata 坂田郡, w prefekturze Shiga. Prawdopodobnie to znajomi Takasue.
- ⁸⁹ Nazwa nieznaną.
- ⁹⁰ Okręg Inukami 犬上郡 w pref. Shiga.
- ⁹¹ Okręg Aichi 愛知県 w prefekturze Shiga lub nazwa dzielnicy w mieście Hikone 彦根市.
- ⁹² Miasto Yasu 野洲町 położone w południowej części okręgu 野洲郡 Yasu.
- ⁹³ Nazwa miejsca w okręgu Kurumoto 栗本郡, obecnie w centrum miasta Ōtsu 大津市.
- ⁹⁴ Chodzi o jezioro Biwa.
- ⁹⁵ Jest to najprawdopodobniej nieścistość, a chodzić tu może o Takebushima 竹生島.
- ⁹⁶ Wyspa w północnej części jeziora Biwa.
- ⁹⁷ Obszar rozciągający się w poł.-wsch. części miasta Ōtsu nad rzeką Seta.
- ⁹⁸ Przybywający do miasta w ciągu dnia podróżni mogli się natknąć na orszaki

arystokratów, którym chciano oszczędzić widoku zmordowanych podróżą ludzi. Zwyczaj nakazywał wjazd do stolicy w nocy. W *Tosa nikki* (Pamiętnik z Tosy, 934/5) także jest o tym mowa: *Yoru ni nashite miyako ni wa iramu to omoeba, isogi shi mo senu...*, „Postanowiliśmy wjechać do stolicy po nastaniu nocy i dlatego nie śpieszymy się.”. Cytat za: Ki no Tsurayuki, *Pamiętnik z Tosy*, przekł., koment. i posł.: Krzysztof Olszewski [w:] *Japonica*, nr 15, ZJiK UW, Warszawa 2002, s. 176.

⁹⁹ Pora Małpy (*saru no toki*) to przedział czasu między godziną trzecią a piątą po południu.

¹⁰⁰ Rogatka w Ōsaka (Ōsakanoseki 逢坂の関).

¹⁰¹ W oryginale: 1 *jō* (= 3,03 m) 6 *shaku* daje ok. 4,85 m.

¹⁰² Chodzi tu o posąg Majtreji (Miroku bosatsu 弥勒菩薩) – Buddy mającego przyjść jako następny po Buddzie historycznym – należącego do świątyni Seki 関寺.

¹⁰³ Stolica Heian została zaplanowana w sposób idealnie symetryczny, w regularnych odstępach przecinały się ze sobą równoległe ulice i aleje, krzyżujące się pod kątem prostym. Główne aleje, biegnące na wschód i zachód, nazywane były *jō*, a odróżniano je przy pomocy kolejnych numerów, od Pierwszej Alei (*Ichijō* 一条) w północnej części miasta, aż do Dziewiątej Alei (*Kujō* 九条), stanowiącej południowy kraniec stolicy. Termin *jō* 条 określał ponadto tereny położone między alejami, co tłumaczy się zazwyczaj jako ‘kwartał’; np. obszar między Czwartą a Piątą Aleją nazywany był Piątym Kwartałem (*Gojō* 五条). Bliżej na ten temat zob.: Ivan Morris, *Świat Księcia Promienistego*, PIW, Warszawa 1973, s. 34-38.

¹⁰⁴ Mowa o najstarszej córce cesarza Ichijō 一条 (986-1011 A. D.) i cesarzowej Teishi 定子 (lub Sadako, 977-1001 A. D.) – pierwszej księżniczce krwi Shūshi 脩子 (lub Nagako, 997-1049 A. D.).

Senri Sonoyama

Sankei and Sanrō of the Heian Period
~Based on Essay 116 of *Makura no sōshi*

This article is devoted to the subject of *sankei* (visit to a temple) and *sanro* (offering prayers in temples and shrines) in the Heian period, when the practice and study of Buddhism deepened and broadened. Many Japanese went then on pilgrimages to sacred places all over the country to worship miracles working Buddha. This paper presents facts about *sankei* and information about its descriptions included in Japanese early novels (*monogatari*). It also contains comments on *sanro* in reference to the essay No. 116 of *Makura no sōshi*, Sei Shōnagon. Moreover, the description of the faith characteristics of the Kiyomizu Temple is discussed in comparison with the essay about the Hase Temple.

Adam Bednarczyk

***Sarashina Nikki* (*Sarashina Diary*, Polish translation)**

Sarashina Nikki (*Sarashina Diary*) is an example of *nikki bungaku* (memoirs) written by a daughter of Sugawara Takasue in the Heian period. Her work stands out for the description of her travels and pilgrimages, reading passion and dreams.

The memoirs start with her childhood days. She remembers her joy at listening to tales and praying to the Yakushi-Buddha to be able to read all of them. Then she reports her long (lasting three months) travel back to the capital with her father, an assistant governor of Kazusa. Afterwards she describes her joy at being presented with a complete text of the *Tale of Genji*, and her dreams to live the life described in the novel. When her life doesn't turn out the way she wanted, she blames it on her addiction to tales, which made her live in a fantasy world, neglecting her faith. In comparison with other works of this kind, the *Sarashina Nikki* covers almost all of the author's life. She spent her youth living at her father's house. In her thirties she got married and became a lady-in-waiting. However, she was too old and too shy to make a career in the court. She

stopped writing her diary for some time in her fifties and no details about her death are known.

Aside from the whirl of romance stories, the diary faithfully accounts enormous numbers of dreams the author had had. The world she lives in is, quite literally, a world of dreams and fiction. The author, however, is aware of this and the diary is meant to be a tale of religious conversion. She eventually learns the disparity between reality and dreams and, through this, learns the truths about Buddhism. The diary, then, is meant to be a warning against the perils and temptations of the world.

The real name of the author is unknown, but she is most often called Takasue's daughter. Sarashina is a Japanese district never mentioned in the diary, but it is alluded to in one of the poems and for some reason chosen for the title of the entire work.

Pamiętnik z Sarashiny is the first complete Polish translation of the Takasue's daughter's diary.

園山千里

平安時代の参詣と参籠

～『枕草子』116段の清水寺を中心に～

平安時代に入ると仏教の信仰が深まり、靈驗あらたかな仏や菩薩を礼拝するために、各地にある靈場を巡礼するようになる。そのような行為を参詣といい、自らの願いを祈願するために寺社に籠もることを参籠という。当時の参詣の実態や物語に描かれる参詣、『枕草子』一一六段の清水寺参籠の様子を考察した。さらに、長谷寺参籠章段との比較により、清少納言における清水寺信仰の重要性を論じた。

アダム・ベドゥナルチク

『更級日記』（ポーランド語訳）

『更級日記』は平安時代の菅原孝標女（すがはらたかすえのむすめ）によって書かれた日記文学のひとつである。彼女の日記の際立った特徴は、紀行と参詣、読書熱と夢の描写である。作者の回想は、幼年時代に始まる。物語を聞く喜び、そして物語をすべて読むことができるように薬師仏に祈ったことを思い出す。次に、上総の国の介である父に伴われて長い（三か月間）かけて平安京に戻ったことを報告する。その後、『源氏物語』全巻を入手した喜びと、生活が物語世界に描写された通りであるようにと夢想したことを述べられている。自らの生活にさほどの幸運がめぐまれないことがわかると、信仰を無視して幻のような生きかたをする結果になった、と物語への耽溺を悔いる。同じのジャンルの他の作品との違いは、『更級日記』が作者のほぼ全生涯を描いていることである。娘時代は父母と一緒に住んでいる。三十代で結婚し、宮仕えする。しかし、高齢だったの彼女は宮廷でさらなる成功を収めるのを恥じる。五十代で日記を書くのをやめているが、その死去について細かなことは知られていない。物語世界は別として、本日記は作者が見た夢の多くを正確に記録している。彼女の住む世界は、文字通り、夢と物語の世界である。と

はいえ、作者はそれに意識的で、日記の主旨は宗教的回心をめぐる物語となることにあった。最終的に彼女は、現実と夢の不均衡を知り、仏の道の真実を学ぶ。従って、本日記の主旨はこの世の危険と誘惑への警告の書となることにあった。

作者の実名は不明だが、一般に標女と呼ばれている。更級は、日本の一地方名称で、一度も日記中に言及されていないが、作中の和歌のひとつに暗示されており、その他の理由からも、日記の名称として選ばれた。

Pamiętnik z Sarashiny は、孝標女日記の、初めてのポーランド語全訳である。

AUTORZY / CONTRIBUTORS / 投稿者

Senri Sonoyama

A doctoral student at the Department of Japanese Literature, Rikkyō University in Tokyo. M.A. at Rikkyō University in 2002. In 2006/2007 studied at Warsaw University, Oriental Institute. Her research interests include Classical Japanese Literature with a focus on the theory of Buddhist service and *Makura no sōshi*.

Adam Bednarczyk

M.A. at the Department of Japanese and Chinese Studies, Jagiellonian University, Cracow in 2006. M.A. thesis: *Between Reality and Dream – about Literary Fiction and World of Dreams in “Sarashina Nikki”*. Currently a Ph.D. candidate at Osaka University. Research interest: ancient Japanese culture, especially of the Heian Period.

園山千里（そのやませんり）

立教大学大学院文学研究科日本文学専攻博士課程後期課程に在学し、現在博士論文執筆中。2002年、文学修士取得。2006年より一年間、立教大学派遣留学制度にて、ワルシャワ大学日本学科に留学（日本学科講師として授業も担当）。専門は日本古典文学。主に法会論と『枕草子』の研究を行っている。

主要論文

2003 「『枕草子』の法会—延慶本「得長寿院供養事」との対比を軸に一」（小峯和明編『平家物語の転生と再生』、笠間書院）

2004 「「雪山」をめぐる覚書—『枕草子』と『源氏物語』を中心に—」（「立教大学大学院日本文学論叢4」）

2004 「清少納言への対抗意識—「朝顔」巻の場合—」、「雪まるばし」、「源氏の女性論」（鈴木一雄監修・小山利彦編集『源氏物語の鑑賞と基礎知識 薄雲・朝顔』、至文堂）

アダム・ベドゥナルチク

2006年、クラクフのヤギェロン大学日本中国学科にて修士号取得。修士論文：「現実と夢の間—『更級日記』に於ける文学的虚構と夢の世界について」。現在、大阪大学博士後期課程在学。専門分野：日本古代文化、特に平安時代。

PRACE NADSYŁANE / FOR CONTRIBUTORS / 投稿

1. Przyjmujemy niepublikowane gdzie indziej dokumenty w formacie MS Word, w objętości do ok. 40 000 znaków z włączeniem spacji. Wymagany język dokumentów do publikacji to angielski lub japoński. W innych językach przyjmowane są wyłącznie tłumaczenia japońskich tekstów.

2. Prosimy dostosować transkrypcję wyrazów japońskich do standardu Hepburna lub Kunrei, przy użyciu dostępnych czcionek. Transkrypcja wyrazów niejapońskich powinna być zgodna ze standardem *de facto* dla danego języka. Redakcja może zasugerować zmianę systemu transkrypcji tekstu.

3. Przypisy powinny znajdować się na dole strony.

4. Do tekstu głównego powinno zostać załączone krótkie streszczenie oraz informacja o autorze w języku angielskim i japońskim.

5. Komitet redakcyjny decyduje o dopuszczeniu tekstu do publikacji i powiadamia o tym fakcie autora.

6. Nadesłanie tekstu oznacza zgodę na jego publikację drukiem i na wprowadzenie do tekstu niezbędnych zmian edytorskich.

7. Teksty prosimy nadsyłać jednocześnie pocztą elektroniczną (wersja elektroniczna) oraz pocztą klasyczną (w formie drukowanej) na następujące adresy:

1. We accept documents unpublished elsewhere in MS Word format, not longer than 40 000 characters including spaces.

Documents should be in English or Japanese. Only translations from Japanese may be accepted in other languages.

2. Use available fonts to adjust the romanization of to the Hepburn or Kunrei standard. Words other than Japanese should be romanized according to the *de facto* standard for a given language. We may recommend the change of romanization system.

3. Footnotes should be included on the bottom of the page.

4. Main text should come with short summary and information on the contributor in English and Japanese.

5. The editorial board qualifies a text for publication and notifies the author of this fact.

6. It is understood that by submitting the text the contributors give their consent to its publication in print and to making necessary editorial changes.

7. We await both your e-mail (computer file) and snail mail (printed version) contributions at:

1. MS Word を用いて書かれた 4 万字以内の未刊行の文章を受領する。用いられるべき言語は英語または日本語である。ただし、日本語テキストからの翻訳については、他言語の文章も受領される。

2. 日本語語彙のローマ字表記は、ヘボン式または訓令式とし標準フォントを使用すること。日本語以外の語彙のローマ字表記は、各言語の標準に従う。編集委員会は、ローマ字表記規則の変更を求める場合もある。

3. 注釈はページ下に載せる。

4. 本文に要約と著者紹介を英語と日本語で付記すること。

5. 編集委員会は、投稿原稿の掲載の可否を決定し、その旨投稿者に通知する。

6. 論文は、投稿された段階で、委員会がそれを公刊し、編集上不可避の変更を行うことを許可したものと見なされる。

7. 原稿は、電子メール（電子文書版）と郵便（プリントアウト版）の双方で、下記に送付すること。

Silva Iaponicarum
Uniwersytet im. Adama Mickiewicza
Instytut Orientalistyczny, Zakład Japonistyki
ul. 28 Czerwca 1956 nr 198
61-485 Poznań, Poland
E-mail: silvajp@amu.edu.pl